平成29年度

北九州市立大学
FD委員会活動報告書

北九州市立大学FD委員会

平成29年度FD委員会活動報告書

目次

1．はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

2．FD委員会について
　(1) 活動概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　(2) 活動一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　(3) 委員構成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　(4) 委員会議事録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

3．FD研修報告
　(1) 春季新任教員研修　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
　(2) 夏季新任教員研修　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　31
　(3) My Compass事業についての報告――学生の「自己省察」支援――　・・・・　34
　(4) 授業でMoodleを使ってみよう　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37
　(5) 授業でMoodleを使ってみよう２　・・・・・・・・・・・・・・・・・　40
　(6) アクティブ・ラーニングの実践例の紹介と意見交換会（２）
　　――外国語教育と“The Model United Nations”(模擬国連)　・・・・　43
　(7) Moodle活用実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　45
　(8) 学外 FDセミナー等参加報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　49

4．授業のピアレビュー報告
　(1) 授業のピアレビュー概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　55
　(2) 平成 29年度ピアレビュー実施状況　・・・・・・・・・・・・・・・　55
　(3) 各部局の取組状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　55

5．新任教員が真似したくなる授業テクニック　・・・・・・・・・・・・・・　79

6．おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　91

※Webページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第１章

はじめに

はじめに

副学長（教育・FD 担当）
FD 委員会委員長　　柳井　雅人

平成 17 年（2005）に公立大学法人へ移行して 12 年ほど経過した。この間の大学を取り巻く環境はめまぐるしく変化し、そこから派生した教育の質的改善に関わる課題に対して、北九大のＦＤ活動は、誠実に向き合ってきた。当大学は、一人ひとりの自発的な自己研鑽をもとにしながら、大学教育における質的改善をはたしていくツールとして、ＦＤ活動を磨いてきた。教育の質的改善に取組む間に、課題として、①FD に対する個人間、部局間の温度差、②FD の内容・方法の一層の工夫の必要性が明確化してきた。

前年度の報告書において触れたように、①については、教職員が内発的にＦＤ活動の必要性を感じ、主体的・自律的に取り組み、参画すべきであるとの考えがあり、各種の研修会や啓発活動が行われることを通して温度差を埋める試みがなされてきた。個々の教職員すべてがＦＤ活動に熱心に取り組んでいるとは言えないが、組織全体としての取組みは着実になされており、少なくとも 12 年前に比較してその活動や成果は大きなものとなっている。この間の取組みに教職員を巻き込む過程については、『教師が変わる、学生も変わる』（中溝幸夫・松尾太加志編、九州大学出版会、2015 年）を参照していただきたいと思う。

次に、②FD の内容・方法の一層の工夫の必要性については、前年度に指摘したように、研修や自主活動がルーチン化してきており、その効果を検証し、改善すべき時期に差し掛かっていると言える。アクティブ・ラーニングに対応した新図書館も開館し、FD 活動を遂行する設備や環境も整っており、実際に授業に活用しているケースも増えている。中期計画においてもアクティブ・ラーニングの導入を謳っており、このような環境を活かすかたちで、計画達成を図っていく必要があろう。

また、「教育再生加速プログラム」（AP 事業）において、北九大ポートフォリオを構築しており、授業外学修時間の測定やＤＰ達成度の可視化を図っている。このプログラムは教育成果を、DP、CP、AP（３つのポリシー）と関連させながら可視化していくものであり、教育の質的改善を果たすために、重要な手段となっている。全学的な対応として、平成 29 年度～30 年度にかけて３つのポリシーおよびアセスメントポリシーを整備しつつあり、これを土台として教育現場の質的改善と向上をめざすサイクルが出来上がってくる。これについて教職員の認識が一致するように、今後はＦＤ、ＳＤ活動を深めていく必要があろう。

本学では他大学と異なり、教職員の創発からＦＤ活動を深めていく体制をとっており、ボトムアップからの現場感覚に基づいた実践的活動を主体としている。今後もこの取組みを一層深めていきたい。最後に、熱心な FD 活動へのご協力を賜っていることについて、中溝幸夫先生をはじめ関係者の方々に対して、この場を借りて、厚く御礼申し上げる。

第２章

FD 委員会について

(1)活動概要

本学のFD活動への取り組みは、平成18年に設置されたFD委員会に始まる。その契機となったのは、大学設置基準による「FD義務化」と「大学認証評価」であった。その後、実質的にFD活動が軌道に乗って動き出したのは平成19年度からであった。最初の４年間はトップダウン型のFDであり、FD委員長（教育担当副学長）と副委員長、FD特命教授、FD担当事務の四者によって「新任教員研修」や「教員研修会」の内容が決定された。

その後、平成23年度からはトップダウン型とボトムアップ型のFD活動を併用しながら、全学のFD活動を牽引してきた。これが“北九州市立大学スタイル”とでも呼べるFD活動である。ボトムアップ型では、各部局・各学科選出のFD委員をメンバーとするワーキング・グループ（以下、WG）を委員会内部に設置して“各学科、各委員のアイデア”に基づいたFD活動が展開されてきた。今年度の３つのWGは、昨年と同様、①研修WG、②FD活動広報WG、③授業評価WGである。

一方、トップダウン型のFD活動は、年２回（春季、夏季）の『新任教員研修』である。この研修は、FD委員長、副委員長、FDアドバイザー、担当事務によって主導され、毎年、全学で10名前後の新任教員が研修を受けており、これまでに全学でおよそ120名程度の新任教員がこの研修を受けている。

各WGの今年度の活動をまとめてみよう。研修WGでは、昨年度のFD委員会において各学科・部局に研修希望調査を行った結果、提案された全学研修案を今年度の研修として企画し、北方キャンパスで７回、ひびきのキャンパスで４回のFD研修会が実施された。

北方で行われた研修は、①『My Compass事業についての報告―学生の「自己省察」支援』（経済学部主催　７月12日開催）、②『「障害者差別禁止法」の施行を受けて、大学教員としての対応』（地域創生学群主催　８月２日開催）、③『授業でMoodleを使ってみよう』（基盤教育センター＆情報総合センター主催　９月20日開催）、④『授業でMoodleを使ってみよう２』（基盤教育センター＆情報総合センター主催　９月29日開催）、⑤『研究不正防止研修』（10月18日開催）、⑥『アクティブ・ラーニングの実践例の紹介と意見交換会(2)―外国語教育と“The Model United Nations”（模擬国連）』（外国語学部主催　11月１日開催）、⑦『Moodle活用実践事例』（基盤教育センター＆情報総合センター主催　３月28日開催）の７つであった。

一方、ひびきのキャンパスで行われた研修は、①『研究不正防止研修―コンプライアンス・研究倫理研修』（９月６日開催）、②『アクティブ・ラーニングのための環境整備について』（10月４日開催）、③『研究不正防止研修―研究活動不正行為、公的研究費不正使用の具体的事例の解説等』（10月18日開催）、④『福岡大学における全学的な教育改善の試み』（11月22日開催）であった。

FD活動広報WGでは、今年度の基本方針として「新任教員が真似したくなる授業テクニック」を紹介することになり、５つの授業科目とそれぞれの担当者が選定された。各科目担当者にWGメンバーがインタビューし、その結果が文章化されて、FD委員会活動報告書に掲載された。（授業評価WGは、特に記録すべき活動は行わなかった。）

『新任教員研修』については、例年通り委員長、副委員長、FD アドバイザー、教務係 FD 担当者による新任教員春季研修が実施され、11 名の新任教員、８名の既在籍教員が参加した。また、春季新任教員 FD 研修のアンケート結果によると、新任教員研修の参加者からは、おおむね好評な印象であったという意見が寄せられた。とりわけ「授業をめぐる FD 委員とのディスカッション」「北九大での FD 活動への取り組み」「学生との交流方法」などが好評だった。

一方、夏季新任研修（テーマは、「１学期授業の振り返りと授業工夫の共有化」）は、９月４日に実施され、新任教員３名、既在籍教員６名が参加した。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。その他、学外で行われた２つの FD 研修（大学教育学会第 39 回大会、目白大学公開講座）に本学教員が参加し、研修内容が FD 委員会において報告され、質疑応答が行われた。

(2)活動一覧

＜FD 委員会＞

日程	回	内容
5 月 10 日	第 1 回	【議題】 1.　委員構成について 2.　平成 28 年度企画、平成 29 年度実施研修の追加について 【報告】 1.　平成 29 年度春季新任教員研修実施報告 2.　平成 29 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 3.　大学教育学会第 39 回大会について 【その他】 1.　平成 29 年度 FD 委員会開催予定
7 月 26 日	第 2 回	【議題】 1.　平成 30 年度 FD 活動の推進予算について 2.　夏季新任教員研修の実施について 【報告】 1.　各 WG の進捗状況について ・授業評価 WG ・研修 WG ・FD 活動広報 WG 【その他】 1.　FD 図書購入希望について 2.　1 学期ピアレビュー実施報告の作成について
11 月 8 日	第 3 回	【議題】 1.　各 WG の進捗状況について ・研修 WG ・FD 活動広報 WG ・授業評価 WG 【報告】 1.　平成 29 年度夏季新任教員研修実施報告 2.　「大学教育学会第 39 回大会」参加報告 3.　1 学期ピアレビュー実施報告 4.　FD 図書の購入について
2 月 7 日	第 4 回	【議題】 1.　各 WG の進捗状況について ・授業評価 WG ・FD 活動広報 WG ・研修 WG 2.　平成 30 年度春季新任教員研修について 【報告】 1.　平成 30 年度 FD アドバイザーについて 2.　「目白大学公開講座」参加報告 【その他】 1.　2 学期ピアレビュー実施報告書の提出について 2.　年間ピアレビュー報告書の提出について 3.　平成 29 年度 FD 活動報告書の提出について 4.　平成 30 年度 FD 活動計画書の提出について

3 月 28 日	第 5 回	【議題】 1.　各 WG の活動状況について ・研修 WG ・FD 活動広報 WG ・授業評価 WG 2.　平成 29 年度 FD 活動報告について 3.　平成 30 年度 FD 活動計画について 【報告】 1.　2 学期ピアレビュー実施報告について

＜研修・講演会等＞

日程	項目	講師等
4 月 3 日 4 月 4 日 4 月 5 日	春季新任教員研修 （制度研修、FD 研修）	13 ページ参照
9 月 4 日	夏季新任教員研修	中溝　幸夫 （FD アドバイザー）
7 月 12 日	全学 FD 研修 「My Compass 事業についての報告 ―学生の「自己省察」支援―」	34 ページ参照
9 月 20 日	全学 FD 研修 「授業で Moodle を使ってみよう」	浅羽　修丈 （基盤教育センター　准教授）
9 月 29 日	全学 FD 研修 「授業で Moodle を使ってみよう２」	浅羽　修丈 （基盤教育センター　准教授）
11 月 1 日	全学 FD 研修 「アクティブ・ラーニングの実践例の紹介と意見交換会（２） ―外国語教育と“The　Model United　Nations”（模擬国連）」	クレイグ・スミス （京都外国語大学外国語学部国際教養学科教授）
3 月 28 日	全学 FD 研修 「Moodle 活用実践事例」	45 ページ参照

(3)委員構成

平成 29 年度の FD 委員会は委員長 1 名、副委員長 1 名、委員 16 名、アドバイザー1 名で構成される。

役割	氏名	所属	職名
委　員　長	柳井　雅人	経済学部経済学科	教 授
副 委 員 長	田村　大樹	経済学部経済学科	教 授
委　　員	Rodger S. Williamson	外国語学部英米学科・社会システム研究科	教 授
委　　員	西　香織	外国語学部中国学科	准教授
委　　員	尹　明憲	外国語学部国際関係学科	教 授
委　　員	畔津　憲司	経済学部経済学科	准教授
委　　員	山下　剛	経済学部経営情報学科	准教授
委　　員	五月女　晴恵	文学部比較文化学科	准教授
委　　員	田中　信利	文学部人間関係学科	教 授
委　　員	矢澤　久純	法学部法律学科	教 授
委　　員	中井　遼	法学部政策科学科・法学研究科	准教授
委　　員	廣川　祐司	地域創生学群	准教授
委　　員	村上　洋	国際環境工学部機械システム工学科	准教授
委　　員	河野　智謙	国際環境工学部環境生命工学科	教 授
委　　員	浅羽　修丈	基盤教育センター	准教授
委　　員	David Adam Stott	基盤教育センター	准教授
委　　員	Roger J.A. Prior	基盤教育センター（ひびきの分室）	准教授
委　　員	鳥取部　真己	マネジメント研究科	教 授
アドバイザー	中溝　幸夫	FD アドバイザー	教 授

第３章

FD 研修報告

(1) 春季新任教員 FD 研修

■　日　時：平成 29 年 4 月 5 日 9:00 ～17:15

■　場　所：北方キャンパス　本館 E-512 会議室

■　研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	北九州市立大学における FD 活動への取組と展望	柳井雅人 FD 委員長
2	今、大学教員に何が求められているか？	中溝幸夫 FD アドバイザー
3	模擬授業観察とピアレビューメモ	阿部容子准教授（外国語学部）
4	グループ討論の説明	中溝幸夫 FD アドバイザー
5	グループ討論と発表 ・テーマ「授業をよくするための工夫」について ・グループ討論（60 分）、発表と質疑応答（60 分）	コーディネーター 中溝幸夫 FD アドバイザー
6	個人ワークと研修アンケート ・授業計画についての説明（10 分） ・研修アンケート（20 分）	
7	既在籍教員との意見交換会	参加者全員

■　参加者数：新任教員 11 名、他 8 名（既在籍教員）

■　研修の概要

研修内容は、ほぼ例年どおりであった。　(1)は「北九州市立大学における FD 活動への取り組みと展望」と題した FD 委員長による研修導入のための基調講演。(2)は FD アドバイザーによる『今、大学教員に何が求められているか？』と題して「FD とは何か」「なぜ必要か」といった FD 関連の基礎知識および「北九大の FD 活動」や「大学における授業の質の向上のための方法」などについての講義。(3)は阿部容子准教授（外国語学部）による模擬授業の一部と先生ご自身が授業で工夫しているポイントなどの解説と質疑応答およびピアレビューの練習。(5)は「授業をよくするための工夫」をテーマにしたグループ討論。（討論には 6 名の既在籍教員の参加があった。）討論の後、それぞれのグループから討論内容を発表してもらい、その内容について全員で質疑応答を行った。(6)の授業計画については、資料にもとづいて説明し、4 月末までに 1 学期に行う自分の科目の授業計画（1 コマ分）を提出すること、夏季研修では 1 学期の「授業の振り返り」をこの授業計画に基づいて行うことが新任教員に伝えられた。 最後に新任教員による今回の FD 研修の印象報告と既在籍教員との懇談を行った。

■　全体的コメントとアンケート結果の分析

本研修プログラムの狙いは、新任教員に「本学の FD に対する取り組み」を理解してもらうこと、「教育（授業）の質向上へのモチベーション」を高めてもらうことの二つであった。アンケート結果は、二つの狙いがほぼ達成されていることを示している。プログラムの中で好評な項目は、既在籍教員の授業（模擬授業）や実体験を聴きながら、また授業工夫をテーマにした内容の濃いディスカッションであった。一方、改良点としては「模擬授業」の時間配分、その意味、位置づけなどをもう少し工夫する必要

があること。例えば、事前に模擬授業のポイントを説明した資料を配布しておくなど、研修前にFD関連資料を新任教員に配布し、あらかじめ自己学習をしてからこの研修に臨む…というやり方を今後は工夫する必要がある。その他、本学の学生の特徴などに特化した話、研修全体にかける時間の短縮、シリーズ北九大の挑戦Ⅲ巻『教師が変わる、学生も変わる』を新任教員全員に配布するなどの意見があった。来年度以降の新任教員FD研修への課題である。

(2) 夏季新任教員研修

■　日　時：平成 29 年 9 月 4 日(月)　10:00 ～ 15:20

■　場　所：北方キャンパス　本館 E-512 会議室

■　研修テーマ：『１学期授業の振り返りと授業工夫の共有化』

■　研修目的：1 学期に新任教員が行った授業について、＜授業設計＞＜授業工夫のポイント＞＜授業実践結果＞＜改善計画＞などを報告し、その内容について質疑応答することによって授業工夫へのモチベーションを高め、また授業工夫についての情報を共有化すること。またグループ討論によって、さまざまな工夫や問題を共有し合うこと。

■　研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	１学期授業の振り返りについて、 新任教員の個人発表（一人 20 分×3 名）	コーディネーター 中溝幸夫 FD アドバイザー
2	小グループ討論　(80 分) ・テーマ『授業の質を高めるために教師はどうすればいいか？』	
3	全体討論（60 分） ・小グループ内での討論のまとめの発表と質疑	

■　参加者：新任教員 3 名、他 6 名（既在籍教員、ＦＤ副委員長、アドバイザーを含む）

■　内容の要約

本研修の主目標は、新任教員の『授業の振り返りと情報共有』であった。新任教員は、４月の春季 FD 研修で計画した授業を実践してみて、どんな結果が得られたかを報告し、その内容について、全員で質疑応答した。その後、2 グループに分かれて、『授業の質を高めるために教師はどうすればいいか？』というテーマについてグループ討論を行った（約１時間 20 分)。キーワードは、＜学生のモチベーション＞＜授業方法＞＜学習評価＞＜授業のピアレビュー＞であった。各グループ内で討論した後、その内容をグループごとに発表し、全員で質疑応答した。

■　研修結果とコメント

研修アンケート回答者 6 名（参加者 7 名）のうち、全体的印象として「非常によかった」(2 名)「まあよかった」(3 名）であった（1 名は無回答)。「よかった」理由の主なものとしては、『分野の異なる先生方の授業に対する考え方を知ることができた点。』『今後の授業運営に役立つアイデア（教材の作成方法、提供方法等）や心構え、ピアレビューの考え方や方法について学ぶことができた。』『ざっくばらんに意見交換ができた。様々な工夫を知ることができた。刺激になった。』などがあった。また、小グループ討論や全体討論は、『楽しかった。』という印象記述もあった。また、本研修から何を学んだかという質問に対する回答などから、本研修の目的の一つである『授業工夫の共有化』は、ある程度、達成できたと言えるだろう。

本夏季研修の改善意見としては、『講義中心、演習中心、実習中心等、授業形式別に今回と同様のテーマで、意見交換ができれば、具体的な授業方法の参考になるのではないか。』『先生方の参加率が低いの

で（特に理系は私のみだった）3 人しか話が聞けなかった。9 月は学会等で忙しいので、8 月中にやるべき。』等があった。研修時期については（今回は「参加該当者が出張のため」という理由で、特に欠席者が多かったので）来年度は 8 月中旬～下旬に行った方がよいかもしれない。また、すべての新任教員が出席可能な時期を設定するというのは難しいので、２回に分けてどちらかに出席するというやり方も考えたほうがよいのかもしれない。また、新任教員に対する FD への関心を高めるような周知も必要である。その他の改善案として、今後は「学生の成績評価のし方」などについても、研修テーマとして取り上げてほしいという要望があった。

(3) My Compass 事業についての報告―学生の「自己省察」支援―

■ 日　　時：平成29年7月12日（水）13：00～14：10

■ 場　　所：北方キャンパス　本館D-202教室

■ 主　　催：経済学部

■ プログラム

1	講習会	山下　剛（経済学部経営情報学科　准教授） 後藤　宇生（経済学部経済学科　教授） 齋藤　朗宏（経済学部経営情報学科　准教授） 畔津　憲司（経済学部経済学科　准教授）
2	質疑応答	1の内容について

■ 参加者数：28名（うち職員3名）

（内訳）

外国語学部英米学科	1名
外国語学部中国学科	3名
経済学部経済学科	3名
経済学部経営情報学科	2名
文学部比較文科学科	1名
法学部法律学科	2名
法学部政策科学科	1名
マネジメント研究科	1名
国際交流センター	1名
基盤教育センター	4名
地域創生学群	2名
国際環境工学部情報メディア工学科	1名
情報総合センター	1名
AP推進室	1名
FDアドバイザー	1名
総務課	1名
学術情報課	1名
学務第一課	1名

■ 研修の概要

3年ほど前から経済学部において運用されてきた、学生の「自己省察」支援の仕組みであるMy Compass事業について、その意図・内容・運用方法・活用事例を報告した。概要は以下のとおりである。

I.　学修と「自己省察」　　山下　剛（経済学部）

II. 経済学部における「自己省察」支援――My Compass 事業の紹介――

1. システム構築の狙いと内容　後藤宇生（経済学部）
2. システムの運用　齋藤朗宏（経済学部）
3. システムの活用事例　畔津憲司（経済学部）

III. 質疑応答

■ 全体的コメントと反省

アンケートの結果は、「大変よかった」が 11 名、「まあよかった」が 8 名であり、本研修全体を通して有意義な意見交換ができたのではないかと考えられる。

アンケートにおける意見を見ても、学修における「自己省察」の必要性、その自己省察を支援する仕組み・活用事例について、一定の理解が得られたようである。

質疑応答では、学部を超えて同じ悩みを共有していることが確認され、また、My Compass に対する多くの前向きな提案がなされ、報告する側の経済学部としてもきわめて示唆に富む有意義な時間となった。

アンケートの意見の中にも示されている個人情報の取り扱いの問題については、質疑応答でも答えたとおり、現段階においても慎重に取り扱い処理しているが、今後さらにより慎重な取り扱いが必要になるであろう。その他、0 stage の問題、質問項目の充実なども、今後の検討課題である。

意見の中には、「全学展開してはどうか」というものもあり、「学生の自己省察支援」について、学部を超えて関心をもってもらう機会となったのではないかと考えられる。

本研修の反省点としては、質疑応答の時間をもう少し確保しておくべきであった。アンケートでも「質疑応答の時間を多くとってほしかった」との意見が寄せられている。これほどの意見・質問が出るとは想定しておらず、ある意味、うれしい誤算であったが、見込みが甘かった。

(4) 授業でMoodleを使ってみよう

■ 日　　時：平成29年9月20日（水）10：40～12：15

■ 場　　所：北方キャンパス　本館D-601教室

■ 主　　催：基盤教育センター、情報総合センター

■ プログラム

1	講習会	浅羽　修丈（基盤教育センター　准教授）
2	質疑応答	1の内容について

■ 参加者数：30名（うち職員4名）

(内訳)

外国語学部英米学科	2名
外国語学部国際関係学科	1名
外国語学部中国学科	1名
経済学部経済学科	3名
経済学部経営情報学科	3名
文学部比較文科学科	3名
文学部人間関係学科	3名
基盤教育センター	5名
地域戦略研究所	1名
地域共生教育センター	1名
マネジメント研究科	1名
グローバル人材育成推進室	1名
FDアドバイザー	1名
学術情報課	1名
学務第一課	3名

■ 研修の概要

本学で導入されるオープンソースのe-ラーニング・プラットホームであるMoodleについての研修を実施した。情報処理教室のパソコンを用いて、講演に参加された方々に実際にMoodleを操作してもらいながら、Moodleについて学んでもらった。その概要は、以下の通りである。

1. Moodleとは何か
2. Moodleで何ができるか
3. 学生の立場からみたMoodleの実習
   3.1. 授業資料の受け取り
   3.2. 課題の確認と提出

3.3. コミュニケーション
4. 教員の立場からみたMoodleの実習
4.1. 授業資料の配付
4.2. 課題の提示と課題ファイル回収
4.3. コミュニケーション
5. Moodleを使う上でのポイント

■ 全体的コメントと反省

昨年度と同様の内容であったため、昨年度の反省点を踏まえて取り組むことができた。特に、昨年度では、時間が足りなくて研修の後半はスピードを上げて説明をしてしまったため、ついていけない参加者が出てきてしまった。今年度は、参加者の理解状況を確認しながら進めることができた。そのこともあってか、アンケート結果では「大変良かった」が21名、「まあよかった」が1名という良い評価を頂くことができた。アンケートの意見でも、「よく分かった」「2学期から使います」といった前向きのコメントを多く頂き、本研修の役割の一端を達成できたのではないかと考える。

反省点としては、アンケートの意見で「Moodle の使用について学生へのアナウンスをどうすればよいのでしょうか。（学生はどの程度Moodleのことを知っているのでしょうか。）」「学生がMoodleを確認する習慣がないと思われるので、ここをどうクリアするかを知りたかった。」とあるように、本学の学生に対するMoodleの理解状況についての説明が不足していた点である。学生には、基盤教育科目の中で、Moodleの基本的な使い方を説明しているという旨を、参加者の方々に伝えることが重要である。

(5) 授業でMoodleを使ってみよう２

■ 日　　時：平成29年9月29日（金）10：40～12：20

■ 場　　所：北方キャンパス　本館D-601教室

■ 主　　催：基盤教育センター、情報総合センター

■ プログラム

1	講習会	浅羽　修丈（基盤教育センター　准教授）
2	質疑応答	1の内容について

■ 参加者数：26名（うち職員2名）

(内訳)

外国語学部中国学科	2名
外国語学部国際関係学科	1名
経済学部経済学科	6名
経済学部経営情報学科	3名
法学部法律学科	1名
法学部政策科学科	2名
国際教育交流センター	1名
基盤教育センター	7名
FDアドバイザー	1名
学術情報課	2名

■ 研修の概要

本学で導入されるオープンソースのe-ラーニング・プラットホームであるMoodleについての研修を実施した。本研修は、以前に実施したMoodleの基礎的な内容に関する研修の第2弾として、Moodleを使った小テストと自動採点をテーマに説明を行った。研修に参加された方々には、情報処理教室のパソコンを用いて実際にMoodleを操作してもらいながら学んでもらった。その概要は、以下の通りである。

1. Moodleとは何か
2. Moodleで何ができるか
3. 小テストの形式
4. 学生の立場からみた小テスト
   - 4.1. ○×問題への解答と自動採点
   - 4.2. 多肢選択問題への解答と自動採点
   - 4.3. 組み合わせ問題への解答と自動採点
   - 4.4. 記述問題への解答と自動採点
   - 4.5. 穴埋め問題への解答と自動採点

5. 教員の立場からみた小テスト
   5.1. 小テストのリソースの追加
   5.2. ○×問題の追加と設定
   5.3. 多肢選択問題の追加と設定
   5.4. 組み合わせ問題の追加と設定
   5.5. 記述問題の追加と設定
   5.6. 穴埋め問題の追加と設定
   5.7. 小テストのリソースの設定方法
6. 小テスト活用のポイント

■　全体的コメントと反省

実際にパソコンを使いながらMoodleを学んでもらう実習形式にしたこともあり、参加された方々にはMoodleに関する知識だけではなく、使い方についても学ぶことができるよい機会になったと思われる。そのため、アンケートの結果で「大変よかった」が15名、「まあよかった」が2名という良い評価を頂いただけでなく、意見では「参考になった。」「理解できました。」という意見も多く頂いた。さらには、「授業で利用していきたいと思います。」「積極的に使っていきます。」など、Moodleを利用することに前向きな意見も頂いたので、研修の役割の一端を達成できたのではないかと考える。

反省点としては、内容の多さが挙げられる。アンケートの意見で「初めの部分が時間がかかりすぎて肝心の部分が早足になっていたのが残念だった。テスト結果をダウンロードする時までやってみたかった。」「内容が少し多すぎたように思います。（小テストの種類を減らすことによって解決可能）」とあるように、内容が多すぎて時間がなくなり、研修の最後の方は早足で進めざるを得なかった。研修時間を意識した準備が必要であることが重要である。

(6) アクティブ・ラーニングの実践例の紹介と意見交換会（2）
――外国語教育と“The Model United Nations”（模擬国連）

■ 日　　時：平成29年11月1日（水）13：00～14：40
■ 場　　所：北方キャンパス　図書館1階　図書館ホール
■ 主　　催：外国語学部
■ プログラム

1	講演	クレイグ・スミス（京都外国語大学外国語学部国際教養学科　教授）
2	質疑応答	1の内容について

■ 参加者数：15名（うち職員0名）

（内訳）

外国語学部英米学科	4名
外国語学部中国学科	1名
外国語学部国際関係学科	1名
経済学部経済学科	2名
基盤教育センター	2名
法学部政策科学科	1名
国際教育交流センター	1名
FDアドバイザー	1名
非常勤講師	1名
国際環境工学部情報メディア工学科	1名

■ 研修の概要

➢ 講師

講師のクレイグ・スミス教授はアクティブ・ラーニングや反転授業の実践・研究で知られる。英語模擬国連の日本国内大会（JUEMUN）の立ち上げ・運営に関わってこられた。JACET（大学英語教育学会）からの受賞歴も持つ教員で、現在も新たな共同研究プロジェクトの推進に関わられている。

➢ 主題と講演内容

主題はアクティブ・ラーニングである。反転授業に関わる講師の研究成果に言及しながら、アクティブ・ラーニングの豊富な実践例をご紹介くださった。

教室内だけが活動の場である場合のアクティブ・ラーニング促進に関わる取り組み、海外発祥の活動をモデルにしながらも日本の事情に即した形への変更を加えた英語模擬国連に関わる取り組み、留学生と日本の学生との交流に基づくアクティブ・ラーニングの試みなど、FD研修参加者に応用可能な有益な事例をご紹介いただいた。講師が関わる現在進行中のプロジェクトや、専門科目も含めて英語で行う科目を設置する際のアクティブ・ラーニングの活用可能性にも話が及び、刺激に満ちた研修になった。

■　全体的コメントと反省

講演は英語で行われ、司会者が随時要点をまとめる形で進めた。講演の途中にも質疑の時間を取ってくださり、随時質問が投げかけられる活気ある会になった。様々な部局からの参加があり、アンケート回収に応じた参加者からの回答も「よかった」「参考になった」が大部分を占めていることから、研修は概ね好評であったと考えられる。

FD研修への出席率の改善が今後の課題である。

(7) Moodle活用実践事例

■ 日　　時：平成30年3月28日（水）13：30～15：00

■ 場　　所：北方キャンパス　本館C-202教室

■ 主　　催：基盤教育センター、情報総合センター

■ プログラム

1	講習会	日高　京子（基盤教育センター　教授） 浅羽　修丈（基盤教育センター　准教授）
2	質疑応答	1の内容について

■ 参加者数：43名（うち職員3名）

(内訳)

外国語学部英米学科	1名
外国語学部中国学科	2名
外国語学部国際関係学科	2名
経済学部経済学科	5名
経済学部経営情報学科	2名
文学部比較文化学科	3名
文学部人間関係学科	2名
法学部法律学科	2名
法学部政策科学科	1名
地域戦略研究所	2名
国際教育交流センター	1名
基盤教育センター	14名
地域共生教育センター	1名
情報総合センター	1名
FDアドバイザー	1名
学術情報課	3名

■ 研修の概要

本学で導入されるオープンソースのe-ラーニング・プラットホームであるMoodleについての研修を実施した。本研修の目的は、実際の授業で実践した事例を元にMoodleの応用的な活用方法について紹介し、参加者のMoodleの活用の幅をさらに広げてもらうことである。研修の前半では、基盤教育センター長の日高京子教授が、後半では、同センターの浅羽修丈准教授が登壇し、説明した。その概要は、以下の通りである。

【日高京子教授の説明内容】

1. Moodle「小テスト」モジュールを使った授業課題の提示と回収の実践例

・記述式解答を効率よく採点するための工夫

2. Moodle「課題」モジュールを使った期末課題の提示と回収の実践例

・多くのレポートを整理するための工夫

3. Moodle「フィードバック」モジュールを使ったアンケートの実践例

・教室外学習の時間を増やす効果について

4. まとめ

【浅羽修丈准教授の説明内容】

1. Moodleとは何か？
2. レスポンスアナライザーとしてMoodleを使う
   2.1 レスポンスアナライザーとは何か？
   2.2 Moodle「フィードバック」モジュールをレスポンスアナライザーとして利用する
   2.3 「フィードバック」モジュールの設定方法
   2.4 具体例1：いかにして学生の注意をひきつけるか
   2.5 具体例2：いかにして知的刺激を連鎖させるか
3. Moodleを使って小テスト・課題の得点を各学生に知らせる
   3.1 小テスト・課題の得点を知らせる意義
   3.2 設定手順
4. まとめ

■　全体的コメントと反省

Moodleに関する研修の第3弾として実施した今回の研修は、PCを使いながらの研修で会った第1弾・第2弾とは異なり、講座形式により実施した。講座形式にした理由は、具体的な操作方法よりも、実際の授業場面での活用方法や工夫の為所についての知見を広げてもらいたかった点にある。アンケート結果をみると、「使い方のイメージがわいて来た。」「個々のノウハウや工夫がそのまま共有されていたのが良く、面白かったです。変にMoodleの説明そのものよりは、その利用上の手法・方法の例示は、既にある程度使っている身としては大変ありがたかった。」「具体的な授業での活用がわかってよかった。自分とは同じ素材をちがうように使用していたので使い方の幅が広がってよかった。」「具体的に使うアイデアが生まれました。」など、参加者が授業でMoodleを使うイメージが広がったと思われる意見が寄せられた。また、アンケートに回答して頂いた29名のうち、「大変よかった」が17名、「まあよかった」が11名という良い評価を頂いただけでなく、「非常に参考になった」が16名、「参考になった」が10名という回答結果も得られた。これらのことから、本研修の目的の一端は達成できたのではないかと考えている。

ただし、アンケートの回答から、PCを使った研修を望む意見が挙げられていることも事実である。今後の課題としては、PCを使いながら、授業の活用イメージを広げられるような研修の計画を立てることが挙げられる。

第４章

授業のピアレビュー報告

(1) 概要

本学で10年前から全学的に各学科単位で行われてきた“授業のピアレビュー”(教員相互の授業公開・参観・研究会）は、大学における授業の質向上のためのもっとも代表的な方法である。同僚の授業を観察したり、同僚に自分の授業を公開することは、自分の授業の振り返りに大いに役立つであろう。現在、授業のピアレビューの具体的方法（担当者、回数、やり方など）については、それぞれの部局・学科の方針で行われている。以下に示す実施状況報告は、平成29年度における各部局学科ごとに行われているピアレビュー活動の報告である。

FD 活動は、一般的にマクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルの３つに区分されている。ミクロレベルのFD活動が「授業の質向上」である。授業設計、授業方法、学習評価などがその主なポイントである。授業の質向上とは、つまるところ『如何にして学生の学びの質を向上させるか』ということである。この意味で『学生の学び』を授業設計（計画）の中心において、授業のいろいろな側面から工夫していくことが必要だ。この視点から授業のピアレビューを行うことが重要だと思う。

(FDアドバイザー)

(2) 実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	12
	中国学科	1
	国際関係学科	1
経済学部	経済学科	7
	経営情報学科	10
文学部	比較文化学科	5
	人間関係学科	2
法学部	法律学科	2
	政策科学科	2
地域創生学群	地域創生学類	2
国際環境工学部	エネルギー循環化学科	5
	機械システム工学科	9
	情報メディア工学科	9
	建築デザイン学科	13
	環境生命工学科	3
基盤教育センター	教養教育部門	3
	情報教育部門	1
	語学教育部門	8
	ひびきの分室	6
マネジメント研究科		3
社会システム研究科		1
法学研究科		2
合計		107

(3) 各部局の取組状況

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科

２．部局の実施方針、方法

4年前から、各学期それぞれ複数名の先生に、授業を行う先生方と参観をなさる先生方で組を作っていただき模擬授業をしていただき、各学期それぞれの組で授業を行って参観をしていただき（但し、授業や出張で不在の者は除く）ピアレビューを行うというシステムをとっています。それにより、模擬授業を行う教員は、参観者の指摘により自分の長所と短所を知り、また参観者は、他の教員の授業に接することで、その長所を自分の授業に積極的に取り込むことが可能になります。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	異文化フィールドワーク	1	7	11	アメリカ研究	1	142
2	基礎演習I	1	30	12	基礎演習Ⅱ	2	32
3	Advanced English Ⅰ	1	25	13			
4	Reading and Discussion	2	27	14			
5	メディア英語ゼミＢⅠ	1	10	15			
6	Media Studies	1	47	16			
7	英語リスニング演習Ａ	1	28	17			
8	英語史	1	30	18			
9	Advanced English II	1	17	19			
10	英語学研究II（英語教育）	1	45	20			

４．出された主な意見、コメント

高い評価がそれぞれ非常に多かったと言えます。例を挙げると、「基礎演習Ⅱ」では、「All well organized. An ideal use of active learning resulting in an interactive positive learning environment. All content and instruction was in the target language of English. Welcoming and friendly opening, nice atmosphere, students are very attentive, very clear instructions given.」。「英語学研究II（英語教育）」では、「授業がしっかりと構成されており、学生は授業開始後に何をすべきか分かっている。教材とパワーポイント資料を駆使している。一方的な講義ではなく、グループディスカッションをふんだんに取り入れ、インタラクティブな授業である」。「Reading and Discussion」では、「教師が明るく学生に接しており、学生もリラックスして楽しそうにしている。本時の目標の明示（口頭と板書）　教員自身の経験を話すことで、学生が背景知識を活性化できる。 ユニット本文の導入部分の丁寧な議論をグループで行った。 学生同士が英語で話そうと努力している。マインドマップの活動が、多感覚かつ創造的であり、学生が主体的に活動している」という意見が出されていました。

５．成果と課題

今年度ピアレビューで授業を行ったのは、それぞれが授業に定評があり、それぞれが英米学科の主要科目であった。参観する教員の立場から見て、共に非常に学ぶところの多い授業であったと言えよう。そうしたところから見ても、今年度の英米学科のピアレビューは大きな成果をあげたと総括出来る。また、今年度も、ピアレビューに専任教員全員が参加することが出来た。これはぜひ来年度も継続していきたい。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	中国学科

２．部局の実施方針、方法

学科教員が少ないため、例年、１年に１回（通常、２学期）、ピア・レビューを実施し、意見交換などをして教員相互の教育技法の改善をはかっている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	時事中国語講読Ⅱ	1	36	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

教員は声も大きく、板書も見やすく、受講生が理解しやすいような工夫をしていたが、受講生の受講態度が全体的に悪かった。
改善策として、キーワードの提示や解説を導入時にしておくと、より内容が理解しやすくなるのではないか、ということと、毎回の授業への積極的な参加も成績評価の対象とすることを明示すれば、受講態度もよくなるのではないか、ということなどが挙げられた。

５．成果と課題

ピア・レビューを通じて、レビューをする側もされる側も、よりよい授業のありかたについて考えることができ、貴重な経験であると感じた。ただ、所属教員の授業時間が重なることが多く、毎年度、参加できる教員が非常に少ないこと、また、一度もピア・レビューを受けていない教員がいることは学科が解決すべき大きな課題である。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科

２．部局の実施方針、方法

国際関係学科の方針として、まず新任教員がいれば新任教員の授業を他の教員がレビューして、新任教員に資するアドバイスができるようにする。新任教員がいなければ、国際関係概論などオムニバスで行う授業で担当教員が相互にスケジュールを調整しながらレビューを行う。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	国際人権論	1		11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・学生に毎回宿題を出しているようだが、授業の冒頭で漫画の資料を示したり、宿題について学生に発言させたりして、授業への関心をうまく引き出しているように思える。
・パワーポイントを使う授業ではどうしても居眠りする学生が出てくるが、この授業ではレジュメを使っていて居眠りする学生ははいなかった。

５．成果と課題

【成果】授業で学生の関心を引き出す方法で示唆を得た。
【課題】ピア・レビューをもっと多くの教員に参加してもらうように、オムニバス形式の授業で呼びかけることが必要になる。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	経済学部	学科等	経済学科

２．部局の実施方針、方法

経済学部全講義を対象とする（ただし、担当教員の事前の了承を得ることとする）。
その上で、経済学部教員は学期に1回、計年2回ピアレビューを実施することとし、新任教員がいる場合には年2回の内1回は新任教員の担当講義を見学することにより、新任教員研修も兼ねることとする。なお、実施に際して、特に学科の区別はせず、一方の学科教員は他学科の授業を見学することも可能とする。
他大学の授業聴講も可とし、また、講義聴講という形でなくとも、たとえば、オープンキャンパスの模擬講義・演習の聴講等、幅広く可としている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	入門演習	1	40	11			
2	入門演習プレゼン本選	2	150	12			
3	オープンキャンパス模擬講義	3	60	13			
4	証券市場論	3	50	14			
5	昼ゼミで英語攻略	1	2	15			
6	ポスターセッション	3	—	16			
7	企業論基礎	3	120	17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

●各先生が熱心に指導されているのを見て、来年度担当することになった場合は、より一層、頑張ろうと思いました。
●理論的な話を興味を持って聞いてもらったり、理解してもらうためには前田先生の講義のように歴史的・具体的な話を織り交ぜた方がいいと感じた。
●随所に、受講者の集中力を高める工夫を凝らしていて、常に、受講者の目線で、定期的に、授業内容を再構築していくことが必要であると感じた。
●プリントの重要な箇所が、穴あきになっていて、学生に記入させるようになっていたり、具体的な数値例を出したりすることで、学生の理解が深まるよう工夫されていて、見習わねばと思った。
●授業はじめにダイジェストの解説が効果的であると知った。

５．成果と課題

聴講した各教員は、学生の興味・関心を引くにはどうしたらよいか、演習でどうしたらよいか等について、新たな知見を得ている。
今年度は、新任の久多里先生の授業について、オープンなピアレビュー日を設定し、多くの教員が参加した。丁寧に作成された配布資料、Moodleの十全な活用などから、多くの刺激を受けたようである。
さまざまな機会が教員にとっても学びの機会になりえるので、来年度はさらにピアレビューの対象を拡大することも考えられる。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	経済学部	学科等	経営情報学科

２．部局の実施方針、方法

経済学部全講義を対象とする（ただし、担当教員の事前の了承を得ることとする）。
その上で、経済学部教員は学期に1回、計年2回ピアレビューを実施することとし、新任教員がいる場合には年2回の内1回は新任教員の担当講義を見学することにより、新任教員研修も兼ねることとする。なお、実施に際して、特に学科の区別はせず、一方の学科教員は他学科の授業を見学することも可能とする。
他大学の授業聴講も可とし、また、講義聴講という形でなくとも、たとえば、オープンキャンパスの模擬講義・演習の聴講等、幅広く可としている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	オープンキャンパス模擬授業	1	100	11			
2	入門演習プレゼン本選（営情）	2	150	12			
3	企業ファイナンスⅠ	1	80	13			
4	労働経済学Ⅰ	1	150	14			
5	証券市場論	4	40	15			
6	経済学入門B	1	150	16			
7	ポスターセッション	2	—	17			
8	システム設計	1	5	18			
9	企業論基礎	3	120	19			
10	経済地理学Ⅱ	1	83	20			

４．出された主な意見、コメント

●クイズなどを用いることで受講者を参加させる方法は参考となりました。
●講義の進め方や、学生への説明の仕方など、講義内容に含められた色々な工夫が勉強になった。
●パワーポイントおよびレジュメを利用した講義で、テンポよく講義が進行する点が参考になりました。
●少人数の演習講義をどのように運営すれば良いのか、多くの知見を得ることができた。講義資料が全体的に色付きで画像が多かったので、視覚的に理解しやすかった。
●パワーポイントの構成が非常に工夫されている。配布レジュメは単なるスライドの写しではなく、受講者が読みやすくメモも取りやすいレイアウトになっていた点も参考になった。

５．成果と課題

聴講した各教員は、学生の興味・関心を引くにはどうしたらよいか、演習でどうしたらよいか等について、新たな知見を得ている。
今年度は、新任の久多里先生の授業について、オープンなピアレビュー日を設定し、多くの教員が参加した。丁寧に作成された配布資料、Moodleの十全な活用などから、多くの刺激を受けたようである。
さまざまな機会が教員にとっても学びの機会になりえるので、来年度はさらにピアレビューの対象を拡大することも考えられる。

平成29年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科

2．部局の実施方針、方法

学外で行われている講義方法にも視野を向けるべきであろうという考えから、外部から講師をお招きして講義を御担当いただく際には、積極的にピアレビューを実施するという方針が学科会議において提示された。そこで、今年度は、いずれも外部講師に御担当いただいた講義においてピアレビューが実施された。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	世界の文化遺産	1	88	11			
2	世界の文化遺産	3	88	12			
3	日本の大衆文化	2	70	13			
4	文化と表象	2	190	14			
5	比較文化概論	4	112	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・豊富な画像資料や映像資料を駆使した講義方法がとられており、それらの資料の用い方の参考になったと同時し、それらの資料が、受講者の興味や好奇心を刺激し、彼らの集中力を継続させることに有効に作用することが理解された。
・講義の導入部分において、或いは、講義のメインとなる題材として、学生にとって身近な題材が取り上げられ、受講者たちの興味を引き付けた上で、専門的な考察の視点や考察方法を学び取らせるという構成になっており、他の分野の講義においても応用したいと感じた。

5．成果と課題

外部講師の方々は、いずれも本学での講義は各一回であったため、大変綿密な準備をされて、講義に臨まれており、そのような講義準備の姿勢が参考になったという意見が複数に及んだ。特に、受講者各位に講義分野に興味をもってもらうことと同時に、講義内容をより深く理解してもらうことを目的として、多数の画像資料・映像資料が的確に使われていたことは大変勉強になった。
今年度は、外部講師の方が担当した講義しかピアレビューを行っていないが、部局内の教員による講義についても実施し、聴講した教員が学びとるばかりでなく、担当教員に対して、講義をより良くするための助言等をしてあげることも必要であったかも知れない。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科

２．部局の実施方針、方法

今年度は、参加教員が専門外の分野でも授業内容を比較的理解しやすく、そのためコメントしやすいという理由から、学科の1年生対象の概論科目をピアレビューを実施することにした。その際、できるだけ参加教員が多くなるように時間割をもとに各学期のピアレビューのための授業をそれぞれ1コマずつ設定した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	現代社会と福祉１	4	97	11			
2	生涯スポーツ学概論	2	80	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

初学者の1年生が学びやすいための工夫として、ロールプレイングを行ったり、自分に直接関わる内容を記述させる等して、学生が授業に主体的・積極的に関わることができるような工夫が施されていた。重要な点への理解がしっかりと定着するように、繰り返しの提示や手法を変えて同じ内容を例示する手立てもあり、非常に参考となるものであった。

５．成果と課題

いずれの授業もピアレビューワーが学ぶべき点が多く、非常に参考になったことが成果として挙げられる。一方、ピアレビューワーとして参加する教員が固定化してしまっているという問題点があり、この点を克服することが当面の課題とされる。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学部	学科等	法律学科

２．部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されているが、基本的に、両学科で共通のことをやることが多い。ＦＤのピアレビューに関しても、法学部の伝統に基づき、この原則に則り、各学期で、各学科から1科目を選んで、ピアレビューを実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	刑法犯罪各論Ｉ	1	107	11			
2	物権法	1	約50	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

各科目には学術的方法論に違いがあるため具体的に主たる意見やコメントを抜き出すことは困難であるものの、最大公約数的に共通する傾向として、①資料提示の方法の工夫、②講義上の力点の置き方（特に学説対立のある論点など）、③伝統的な講話/発問以外の講義手法についての工夫について、各参加授業ごとの工夫に着目する意見・コメントが提示された。

５．成果と課題

今年度も、各学期、各学科から1科目を選んだことで、法律学科の科目としては合計で2科目について実施した。このやり方は、今後も続けていきたいと考えている。きちんとしたピアレビュー報告書を作成できた点は良かったし、加えて、対象となった各授業がいずれも良好な授業であったことも成果であった。課題としては、実施科目は2科目だけであっても、ピアレビューに協力して下さる先生が特定の先生のみになってしまうようでは、学部全体のＦＤという観点から、いささか問題であろうから、ピアレビューに協力して下さる先生の拡大（すそ野の拡大とも言える。）を図っていきたい。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学部	学科等	政策科学科

２．部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されているが、基本的に、両学科で共通のことをやることが多い。ＦＤのピアレビューに関しても、法学部の伝統に基づき、この原則に則り、各学期で、各学科から1科目を選んで、ピアレビューを実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	政策構想論	1	約150	11			
2	福祉国家論	1	約250	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

各科目には学術的方法論に違いがあるため具体的に主たる意見やコメントを抜き出すことは困難であるものの、最大公約数的に共通する傾向として、①資料提示の方法の工夫、②講義上の力点の置き方（特に学説対立のある論点など）、③伝統的な講話/発問以外の講義手法についての工夫について、各参加授業ごとの工夫に着目する意見・コメントが提示された。

５．成果と課題

今年度も、各学期、各学科から1科目を選んだことで、政策科学科の科目としては合計で2科目について実施した。このやり方は、今後も続けていきたいと考えている。きちんとしたピアレビュー報告書を作成できた点は良かったし、加えて、対象となった各授業がいずれも良好な授業であったことも成果であった。課題としては、実施科目は2科目だけであっても、ピアレビューに協力して下さる先生が特定の先生のみになってしまうようでは、学部全体のＦＤという観点から、いささか問題であろうから、ピアレビューに協力して下さる先生の拡大（すそ野の拡大とも言える。）を図っていきたい。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類

２．部局の実施方針、方法

地域創生学群では、学生たちと共に教員が経験科学としての「地域創生学」の創設に向けて、より良い教育プログラムの開発を目指している。したがって、本学群のFD研修の多くは、地域活動やそのリフレクションの手法、気付きの促し方、ファシリテーションの具体的手法について、各教員の専門分野の視点に立って行われているものの共有化をし、より良いものにしていくというのが基本的方針である。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	地域学入門	2	122	11			
2	地域マネジメント実践論Ⅱ・Ⅳ	6	70	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

経験科学としての「地域創生学」を創設するために、ただ、活動をするだけでなく、なぜ大学生が地域活動をするのか、その活動を通じた「学び」とは何か、その学びを社会や自分の将来設計にどのように生かしていくべきか、そのような「学び」を統合的に視野に入れた指導が必要になってきている。
したがって理論だけでなく、学生の学びと地域の発展とを両立するための、教育を地域創生学群の教員は全員が共有化していかなければならない。そのための、具体的手法や学生への促し方、地域活動をする理由などの説明の仕方など、教育的ファシリテーション能力を育成していくために、地域創生学群のFD研修は極めて重要な意味を持つという点で一致した。

５．成果と課題

今年度のFDは、1学期に活動のリフレクションを効果的に行うための手法を眞鍋教授の授業において、外部の専門家も踏まえて実践的に共有化することができた。また、2学期においては、実際に地域創生学群の１・2年生を対象に、日ごろの実習活動を自分たちで振り返り、経験の言語化を促すような取り組みを複数の実習の枠を超えて実施した。その際、学生相互の質疑応答等の促し方や競争意識の醸成によるより質の高いリフレクションへ導くための工夫を地域創生学群の教員間で共有することができた。課題としては、今年度の取り組みが学生たちの能力向上に本当に寄与しているのか、次年度も引き続き検証していく必要があるという点である。

平成29年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	エネルギー循環化学科

2．部局の実施方針、方法

○今年度は、必修科目で低学年の開講科目を各学期で選定し、対象科目としてピアレビューを行った。
○授業内容だけではなく、板書、パワーポイントの見やすさ、声の大きさ、話すスピードなど全体の雰囲気についてのチェックを行った。
○授業公開は、参観者によるピアレビューの結果を授業公開者に渡し、授業改善の方法などを考える方法で実施した。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	分析化学	2	55	11			
2	地球環境システム概論	2	76	12			
3	基礎有機化学	2	36	13			
4	化学平衡と反応速度	2	151	14			
5	地球環境システム概論	5	76	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

ピアレビューの結果、授業そのものは概ね問題なく進められており、参観者コメントは大半が良好なものであった。一部の科目で後席に陣取る学生も見られるが、全体としては受講生も前席を占め、真剣な受講態度であった。演習問題やレポートなど学生が興味を失わないような各教員の工夫の様子が知識として共有できつつある。個別のコメントで内容に関するものがあり、今後一層、教員間・科目間の連携を密にしてゆくことで、教育効果の向上が見込めると思われる。

5．成果と課題

教室の設備などの問題がいくつか指摘されている。黒板、マイク、プロジェクターなど視認性の向上は継続してチェック項目としてあるべきである。31年度より開始する新カリキュラムに向けて、技術的な課題はアクティブラーニングにどう対処するかであると思われる。一方で性急なやり方の変更は生徒・教員の双方に混乱を招くだけである可能性が高いため、抽出した一部講義でアクティブラーニングを徐々に試してゆき、その経験や知識を教員間で共有する努力を継続することが必要と思われる。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	機械システム工学科

２．部局の実施方針、方法

本年度の実施方針は，学科内でアンケート評価が高い講義，エネルギーをテーマとした講義および新任教員が担当している講義を対象としたピアレビューを行うこととした．全ての学科内教員が出席できるよう，原則として各講義は2回実施した．1回目の講義に参加できなかった教員には2回目に出席するよう案内した．

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	機械工学基礎（熱の利用）	1	45	11			
2	機械振動学（1回目）	11	52	12			
3	機械振動学（2回目）	2	52	13			
4	伝熱工学・同演習（1回目）	9	55	14			
5	伝熱工学・同演習（2回目）	3	55	15			
6	計測学（1回目）	10	49	16			
7	計測学（2回目）	1	49	17			
8	エネルギー変換工学（1回目）	7	46	18			
9	エネルギー変換工学（2回目）	1	46	19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

どの講義も理解度向上や学生の興味を引くために具体的な工夫が見られ，関連した意見が多く見られた．具体的な工夫としては，講義中に定期的に質問を設ける，板書とＰＰの活用方法，実際の模型を用いた説明による理解度向上の方法，小テストによる理解度の確認手法，当日の学習内容を講義の最初に確認する，などがあった。改善を求めるコメントとして，学生の興味を講義の最後まで持続させる工夫の方法，画像や動画の活用方法，遅刻して入室してきた学生への対処方法，講義内容の難易度・分量，学生の理解度を測る工夫などがあった．

５．成果と課題

理解度向上や学生の興味を引くために具体的な工夫を実際に見学することができ参加者にとって有意義なピアレビューであったと思われる．また，学生の興味を講義の最後まで持続させる工夫の方法，画像や動画の活用方法，遅刻して入室してきた学生への対処方法，講義内容の難易度・分量，学生の理解度を測る工夫，など多くの具体的な講義改善の提案もされており，ピアレビュー担当者の次年度以降の講義改善の参考にもなったものと思われる．

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報メディア工学科

２．部局の実施方針、方法

情報メディア工学科では新カリキュラムの進行に合わせ、これまで１年次科目から３年次科目、実験・演習科目のピアレビューを行ってきた。今年度と来年度は大学院科目を対象にピアレビューを実施することとし、今年度はまずコンピュータシステムコースの科目を中心にピアレビュー対象とした。また、前年の学生アンケートの評価が低かった科目があったため、学科長とＦＤ委員でピアレビューを実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	ソフトウェア工学概論	3	17	11			
2	適応信号処理	2	32	12			
3	組み合わせ最適化論	3	20	13			
4	システム制御理論	3	11	14			
5	アーキテクチャ設計論	3	13	15			
6	制御応用工学	2	25	16			
7	医用工学基礎	6	7	17			
8	VLSI物理設計	4	7	18			
9	センサ信号処理	2	6	19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

特に大きな問題は指摘されず、全体的に肯定的な意見が多かった。
例)
・少人数教育の特徴を生かしている
・個々人の理解度に合わせた指導が行えている
・計算機を用いた演習を取り入れており、理解を深める工夫がなされている
一方で、新しい試みがなされている授業に対して踏み込んだ意見も寄せられた。
例)
・網羅的な説明等により基礎の定着が必要
・専門書が偏りすぎている
・何を学ばせたいのか、学生への係わり方が不明

５．成果と課題

大学院の講義は受講者数も少なく、より専門性が高いため、実施形態に合わせた様々な工夫がなされていた。このような取り組み内容を教員間で共有できたことは大変有意義であったと思われる。
全体的に大きな問題の指摘はなく、概ね高評価であった。いくつか改善すべき点を指摘された科目もあったが、すでに検討がなされており、次年度以降さらなる改善が期待できる。
アクティブラーニングのような新しい試みはまだ課題も多く、継続的に検討を続けていく必要があると考えられる。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	建築デザイン学科

２．部局の実施方針、方法

第一学期、第二学期のいずれか、各教員が授業公開あるいは参観を１回以上行う。
講義科目・演習科目・実験科目のバランスを考えながら行う。
参観者は、できるだけ研究分野の同じ教員が参加するように努め、助言を行うことにより具体性の高い授業改善を図るが、他分野の先生方の相互ピアレビューも行い、授業の分かりやすさも検討された。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	コンクリート系構造の設計	1	65	11	建築材料実験	2	50
2	建築景観デザイン工学	1	51	12	建築材料実験	2	50
3	見学WS演習Ⅰ	1	50	13	建築材料実験	2	50
4	地域環境情報演習	1	16	14			
5	環境工学実験	1	50	15			
6	環境設備演習	1	20	16			
7	近代建築史	1	61	17			
8	音と光の環境デザイン	1	59	18			
9	環境設備実験	1	19	19			
10	環境造形演習（演習）	1	48	20			

４．出された主な意見、コメント

コメントカードの活用や、有効な質問、提出物のチェックなどにより、学生の理解度を確認しながら講義・演習を進めている教員が多かったことは評価できると考える。　実験系の授業においても、他の座学の授業との関連をきっちり説明したり、学習内容の全体像を提示したりしている教員も多かったことも評価できると考えられる。

５．成果と課題

今年度、建築デザイン学科では、学生の修学状況のボトムアップを図ることをテーマにピアレヴューを行った。しかし、学生の授業に対する姿勢の差を指摘する教員も多く、学修の進んでいる学生と遅れている学生の両方に対応することの困難さがうかがえた。学科として、全体のレベルアップを図りながら、成績上位層にはより習熟度を上げたいというのが教員の心理であると理解するが、これらの両立が大切なことに変わりなく、今後も改善が必要であると考える。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境生命工学科

２．部局の実施方針、方法

・専門分野ごとに同じ分野の教員が公開・参観する方針とした。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	微生物学	4	102	11			
2	一般物理学（生命）	1	47	12			
3	環境と経済	1	28	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・公開した授業についてのコメントは良好なものが多かった。「微生物学」に対しては、ピアレビュー参加者から、「大変聞き取りやすい。」、「明確で聞き取りやすい発話であった」、「マイク使用により説明が聞き取りやすい」などの評価が、また説明に関して、「既出単語について復習も兼ねた説明がありわかりやすい」、「板書速度と説明のバランスが良い」などの記述があった。また、講義の工夫に関して、「学生は最後まで飽きることがなかった」、「みな大変興味深く講義を聞いている」、「微生物の知識が何の役に立つのかを具体的な話題により説明されていた」、「身近な科学を題材に、とても聞きやすい」とのコメントがあった。「一般物理学」は、今年度から単独学科での開講となり、適切な変更を行ったことを評価する一方、教科書を重視するようにとの指摘もあり、担当者は前向きにフィードバックする計画を述べている。

５．成果と課題

・FD委員である河野が後期全般を通じて体調を崩したため（会議自体にも参加できないことあり）、学科でのピアレビュー活動の声かけが不十分だったことが主要な原因。
・４人が参加した講義では、参加者からポジティブなコメントが並んだ。
・FD委参加者は少ない結果になったが、FD活動に参加した教員の熱意は高い。

平成29年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	教養教育部門

2．部局の実施方針、方法

本学における他の教員の授業を少なくとも１回ピアレビューするか、もしくは、自らの授業を１回ピアレビューしてもらう。なお、本報告書には、地域創生学群(教養・情報教育部門に所属する教員の半数が兼任)におけるピアレビューに参加した教員については記載しない。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	比較文化概論	1	200	11			
2	テロリズム論	1	200	12			
3	政治の中の文化	1	80	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・パワーポイントは、重要なポイントを表で理解できるように工夫されていた。
・本を読んで得られる知識と、教員の体験を交えた専門知識を上手に組み合わせることは、全学向けの授業に活用できる技能だと再確認することができた。
・資料中、大切な箇所には空欄が設けてあり、学生は講義を聞きながら記入していくようになっていた。ポイントとなる点を記憶させる上では効果的だと思う。
・「今日の講義の目的」「前回の復習」「今日の講義のまとめ」が提示されており、学生は授業内容を整理･理解しやすかっただろう。「復習と予習のための文献」も紹介されていた。さらなる学習につながる、こうした配慮も大切であると感じた。

5．成果と課題

今年度も昨年度に引き続き、各自で都合のよい時間に興味ある授業のピアレビューを実施してもらうという形式をとった。その成果として、他学部科目のピアレビューの実施ができたことは、大きな成果である。今後は、今年度に引き続き他学部科目のピアレビューを実施しつつ、基盤教育センターの他部門のピアレビューも実施し、多角的な観点から授業の参考となる刺激を受けていく必要があると考える。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	情報教育部門

２．部局の実施方針、方法

本学における他の教員の授業を少なくとも１回ピアレビューするか、もしくは、自らの授業を１回ピアレビューしてもらう。なお、本報告書には、地域創生学群(教養・情報教育部門に所属する教員の半数が兼任)におけるピアレビューに参加した教員については記載しない。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	データ処理	1	45	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・授業開始時にアイスブレイクをすることにより、和やかな雰囲気を作っていた。
・担当教員が独自に開発したWebベースのレスポンスアナライザを用いて、学生に質問を投げかけながら授業を展開していた。
・今日の授業の目標と内容をスライドで明記していた。
・授業内容のひとつにタイピング指導があったが、その必要性を具体的に説明していた。
・教科書だけでなく、オリジナルな教材を作成して授業に挑んでいた。

５．成果と課題

ピアレビュー対象となった「データ処理」を担当していた教員は、新任の教員であったため、単なるピアレビューという位置づけだけではなく、本学での教育歴が長い教員からアドバイスをするという位置づけでもあった。その意味でも、このピアレビューは大きな成果であったと考えている。今後は、情報教育部門の教員が担当する授業を公開授業として展開し、多角的な観点からアドバイスを受け、今後の授業の参考にしていきたいと考えている。

平成29年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	語学部門

2．部局の実施方針、方法

基盤教育センター提供の必修の第一外国語は時間割上の配置に制約があり、複数の専任教員が同じ時間帯で授業を行っている現状があるため、特定の授業をピアレビュー対象に指定した場合、物理的に参加できない教員がいる。さらに、授業は原則として達成度別編成であり、使用教室も普通教室とコール教室のクラスが混在しているため、授業により、その方針や運営がある程度異なり得る。従って、時間割上の制約と、担当クラスにより教員の興味が多様であることを考慮し、各教員が年間に最低1回、任意の授業を参観することを義務付けている。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	英語III（外国語学部）	1	25	11			
2	ビジネス 英語I（地域創生学群）	1	15	12			
3	英語III（経済学部）	1	33	13			
4	英語V（経済学部）	1	32	14			
5	英語VI（経済学部）	1	23	15			
6	英語IV	1	19	16			
7	英語IV（外国語学部）	1	17	17			
8	英語IV（経済学部）	1	28	18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

リーディングやリスニングといった受信型のスキルを訓練する授業においては「受講生の興味を考慮したトピックを扱い、学生の反応もよかった」「（長文読解の教材に）時事的な話題を関連付けて、受講生の興味を育てる工夫がなされていた」など、肯定的な評価が多かった。また、スピーキングやライティングなど発信型のスキルを訓練する授業においても「学生のプレゼンテーションとその質疑応答を通じた英語の運用能力向上だけでなく、補助教材を用いて学生がトピックを深く理解できるような配慮がなされていた」「ペアワークを多用し、教員が机間巡視をして発話の手助けをするなど目配りが行き届いていた」「学生に身近な話題をとりあげて、英語の発話を促していた」など概ね肯定的な評価が挙ったが、一方で、「受講生と教師、受講生同士のやりとりがやや不足しており、debateなどを用いて意見交換を活発化させるのも一つのやり方ではないか」と指摘される授業もあった。

5．成果と課題

リーディングやリスニングのような受信型のスキルを訓練する授業は、時に一方的で単調になりがちである。が、学生が積極的に授業に加わる意欲を育てるために、学生の興味をひくような適切な教材選択をどの教員も心がけているのが窺われ、評価できる。また、スピーキングやライティングの授業は、学生自身が積極的に外国語で発信する努力が要求されるが、実際は能力あるいは意欲の欠如のため、受身になりがちである。そのため、学生の能力や状況に応じたきめ細かい指導が必要とされるが、ピアレビューの対象となった授業では個々の学生への指導が十分に行き届いているように見受けられる。しかし、学生への指導が熱心になるあまり、学生同士の発話のやりとりが不足してしまわぬよう、バランスのとれた授業運営が必要とされる。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	ひびきの分室

２．部局の実施方針、方法

基盤教育センター分室の基本方針としては、1年に一回授業参観をする、もしくはされると義務付けられている。しかし、時間割上の配置に制約があり、とりわけ英語科目では複数の専任教員が同じ時間帯で授業を行っているという現状です。従って、特定の授業をピアレビュー対象に指定した場合、物理的に参加できない教員がいる。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	倫理入門	1	35	11			
2	工学倫理	1	173	12			
3	経済入門 I 機会クラス	1	50	13			
4	Scientific R/W I	1	24	14			
5	Extensive Reading	1	21	15			
6	Basic R/W II	1	24	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・題材について説明がなされた後、受講生が考えて論理を組み立てて行く余地が設定されていた。自身の授業ではまず重要な点を結論として挙げ、説明をする方法をとっているが、本日の森本先生の授業を参観したことで、能動的な思考、学びを促すやり方が必要であると感じた。
・前の回で受講生が提出した質問および感想について、個別に丁寧に返答していた。授業でも一部を説明し、全回答はMoodleで見ることができるようになっており、Moodleが有効に活用されていた。
・実験経済学的手法を取り入れると履修者が概念をより自身の体験として受け止められるようになると思いました。

５．成果と課題

様々アドバイスの提供や意見交換ができたことはよかったものの、時間割上の関係で、全員がピアレビューを実施することが困難であることは事実です。来年度、公開できる授業の日にちをなるべく早い段階から告知し、分室の皆が参観するもしくは参観されるようにしたいと思います。
もう一つの課題としては、参観する際に使用する様式について混乱があり、様式の修正もしくは再作成を検討する必要があるのではないかと思います。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	大学院	学科等	マネジメント研究科

２．部局の実施方針、方法

・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
・今年度のピアレビューは、FD委員3人が分担して、新任教員の担当講義・新規開講講義を中心に実施した。
・ピアレビューの結果は、FD委員会で報告し教育内容・方法の改善を図ることとしている。
・平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	パブリック・マネジメント	2	11	11			
2	問題解決スキル	1	19	12			
3	地域産業	3	5	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・理解しやすいペースや丁寧な説明（パブリック・マネジメント）
・説明と学生への問いかけによる双方向性（パブリック・マネジメント）
・教材のわかりやすさ・見やすさの工夫（問題解決スキル、地域産業）
・ミニッツペーパー利用などによる前回の疑問への回答（地域産業）
・実務経験に基づいた事例の紹介（パブリック・マネジメント、地域産業）
・グループワークの課題選定が適切（NPO/NGO実践論）
・学生の理解度の差にあわせた工夫が必要ではないか（問題解決スキル）
・ディスカッションにおける焦点化の工夫（論点提示）の必要性（地域産業）

５．成果と課題

・学生のバックグラウンドの多様化や知識・経験面のバラツキが、一層拡大しているように感じる。これらの変化に対応した講義・カリキュラムの在り方が課題になりつつある。
・ひとつの対応策として、適切な予習・復習の指示があると思うが、学生が過負荷にならないような配慮とともに、今後も継続してFD委員内および研究科内で議論していきたい。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	社会システム研究科	学科等	

２．部局の実施方針、方法

社会システム研究科博士前期課程設立時から設置されたこの科目は、各研究科毎の縦割り的カリキュラムの基に修学していた大学院生に横断的・複合領域的な内容に目を向けさせることにより複眼的で包括的な発想を持たせること、大学院生のそれぞれの専攻の枠を超えた複合領域的な観点から種々の研究課題を討議することを目的としているが、平成26年度から総合概論として改編され、さらに昨年度から東アジア、文化言語、地域コミュニティ、現代経済の４専攻からの１名ずつの教員によるオムニバス形式となった。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	社会システム総合概論	7	12	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

２～３回で指導するのは難しいと思った。議論が思ったより活発でよかった。「東西文化の比較」については最後にまとめがあるとよかったと思うが「文化の融合」については「取り入れたモノと取り入れなかったモノ」＝「良いものと悪いもの」という言い方で良いか疑問である。グループ・プレゼンテーションに対して、グループでコメントや質問について話し合う時間を設けた点は昨年度よりも良くなったと感じた。今年度も初回から3回担当したが、その頃と比べて学生同士の関係が密になって、雰囲気がとてもフレンドリーなものになっていたのでグループ・ワークを続けてきて、そのような雰囲気が醸成されたのかと思った。昨年度より完成度が高いプレゼンテーションになったように感じられたがグループ3名の役割分担と連携が課題であると思った、などの意見が出された。

５．成果と課題

昨年度は4人の教員がプレゼンテーションを指導し、各々3回目で発表を行ったが今年度は3人の教員で4回目で発表を行う方法になった。学生は3人1組で報告時間各30分、質問時間各15分であった。その結果、授業がアクティブ・ラーニング中心になり学生が研究内容を発表して論理的なまとめ方になったことと、留学生が高度な日本語能力を見せ日本人学生との意見交換ができて刺激的な授業になったという2つの成果が上がった。一方、昨年度までの１学期に4つのテーマについて幅広く発表を行うという方法と今年度のようにテーマの数を絞って発表から議論までをプロセスを重視して行うという方法のどちらがより学習効果が得られるかという点を引き続き検討する必要があることと、グループ3名の役割分担と連携について検討する必要があるということが課題である。

平成29年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学研究科	学科等	

２．部局の実施方針、方法

従来、法学研究科のピアレビューは実施してこなかったが、昨年度の授業終了の頃に、法学研究科でもピアレビューをやるようにとのお達しがあって、授業終了直前に、急遽、1科目実施したという経緯がある。今年度は、法学研究科でもピアレビューをきちんと実施することとしたが、ただ現実問題として、在籍している院生数が非常に少なく、加えて論文指導科目はピアレビューに適さないため、各学期で1科目のみ実施することとした。1学期に法律系科目、2学期に政策系科目について実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	刑法BⅢ	1	1	11			
2	政治学Ⅳ	1	1	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

大学院の授業であるため、各科目には学術的方法論に違いがあるし、しかもどちらも受講生が1名であったため、共通する主な意見・コメントは抜き出しにくいが、いずれも受講生の関心に沿った内容の授業であった。どちらの授業も、受講している院生が、自分の特定課題研究論文に繋がる素養を身につけることができそうな内容であった。

５．成果と課題

年間で2科目だけとは言え、ピアレビューを実施したことにより、各院生の問題関心にマッチした講義を教員側が心がけていることを確認することができ、この点が成果と言える。昨今の法学研究科は、留学生がおよそ3分の2を占めているため、留学生の満足度を高める講義のあり方を探ることが、継続的課題と言えよう。

第５章

新任教員が真似したくなる

授業テクニック

新任教員が真似したくなる授業テクニック—5 名の先生へのインタビュー—

はじめに

FD 活動広報ワーキング・グループでは、授業改善に関する何らかのヒントや示唆を提供すべく、今年度も授業紹介を行うことといたしました。

今年度は「新任教員が真似したくなる授業テクニック」を紹介いたします。これまでは、「ベストプラクティス」か「特色ある授業」のいずれかが紹介されてきましたが、本年度は、初めての試みとして、本学に赴任したばかりの新任の先生方とともに、新任の先生の関心に沿って、先輩の先生方から学ぶ、というスタイルを採ることとしました。先輩の先生方にお話を伺うことは新任の先生方にとってもよい機会となるのではないかということと、新任の先生方の新鮮な問題関心と熱意によってわれわれも初心に帰ろうということが今回の企画の趣旨となります。

まず、今回、趣旨に賛同され、ご協力いただいた新任の先生方は、下記のとおりです。

木山直毅先生（基盤教育センターひびきの分室）
久多里桐子先生（経済学部）
中井遼先生（法学部）
石塚壮太郎先生（法学部）
秦正樹先生（法学部）
柳川勝紀先生（国際環境工学部）

以上の先生方とともに、本ワーキング・グループのメンバーが、4 学部 5 名の、下記に示す先生方のご協力のもとに、「新任教員が真似したくなる授業テクニック」を紹介しています。この 5 名の先生方は、新任の先生方と本ワーキング・グループのメンバーが学内において独自に行った情報収集の上で選定された方々であり、趣旨に賛同されインタビューにご協力いただきました。

山崎進先生（国際環境工学部） 科目：コンピュータシステム
畔津憲司先生（経済学部） 科目：労働経済学 I
小野憲昭先生（法学部） 科目：相続法
田島司先生（文学部） 科目：社会心理学・心理学概論
森田洋先生（国際環境工学部） 科目：微生物学

インタビューは 12 月に実施し、授業の事前準備、実際の授業の進め方、授業アンケートの活用法、学生のやる気や興味・関心をどう引き出すか、学生が学ぶべき目標をどう設定しているか、などについてお聞きしました。

なお、本章の作成にあたり、作成方針やインタビューの質問項目などにつきまして、本学FD アドバイザーの中溝幸夫先生より有益なご助言を数多くいただきました。記して感謝申し上げます。

（ワーキンググループメンバー：
山下　剛、西　香織、矢澤久純、浅羽修丈、河野智謙）

授業設計に努力を惜しまない山崎進先生（国際環境工学部情報メディア工学科）

インタビュアー：木山直毅先生、西香織

【科目名】コンピュータシステム
【配当年次】2 年次
【選択・必修の別】選択
【受講者数】約 80 名
【他学部他学科が受講可能かどうか】可能だが実質 0 名

真似したくなる点：

「小テストの実施のしかた」。これまで小テストを画一的に行ってきたが、理解度や進捗状況が異なる場合、統一したテストのやり方では、雪だるま式に理解度の差が生じてくる。一方で山崎先生の科目では、テスト A を合格したらテスト B、テスト B を合格したらテスト C と各学生の理解度にあった形でテストを行っている。このような形式を取ることによって得意な学生は先に進むことができ、苦手な学生は反復学習をすることができ、語学が苦手な学生の底上げにもつながると感じた。（木山先生）

1. 実際の授業の進め方

事前にきちんと授業の組み立て方を考え、一貫性をもち、ブレをなくすことを心掛けながら、大きく以下のステップで進めている。

Ⅰ　オリエンテーション　3 つの学習目標――1. 概念や知識の理解（暗記）、2. 原理を直感的に理解する（原理を説明できる）、3. 1、2 を応用できる――の提示

Ⅱ　単元 1　コンピュータ CPU の動作原理の理解
予習動画をもとに、ロールプレイングワークショップ（3～4 人 1 組でプログラムコード、リファレンスマニュアル、レジスタマップを与え、コンピュータのしくみ、ルールを体感させる）を実施。基本的な用語やプログラムの簡単な動作を書き出す小テスト実施（紙ベースと電子版を併用）。

Ⅲ　単元 2　C 言語のアセンブリ言語コード化の理解
用語の暗記のため、小テスト実施。単元ごとに合格ラインを満たしていたらその単元は合格、満たしていなければ単元を反復、最終的に全単元をクリアさせる。

Ⅳ　単元 3　オペレーティングシステム（OS）の理解
小テストを実施。後半にいくに従って、自分たちで調べていくような内容にする。

2. 授業の事前準備、事後作業

小テストなどを含め、学期が始まる以前に準備がほぼ完了しているため、毎回の授業の事前準備はほとんどない。反面、事後作業は多く、小テストの採点や、Moodle を利用した教員独自のアンケート（受講者の感想や改善点、要望などを具体的に書かせている）の確認及びそれに対するフィードバックに多くの時間が費やされる。

3. 受講者の知的好奇心、やる気を引き出すための工夫

原理や概念について「わかった！」というのは大きな動機付けとなり、自信にもつながるため、受講者に実感してもらえるような工夫をしている。ほかの授業ではあるが「Q & A」を充実させたことが受講者の理解に大変効果的であったことから今後も取り入れたい。

4.　アクティブ・ラーニングについて

4－1.「アクティブ」の定義と授業時間外の学習についての考え

「アクティブ」の定義は学習段階にあわせて姿が変わる。よって、はじめは「足腰を鍛える」という点で、教師によるある程度の強制的な介入は必要だが、学生の知的好奇心に合わせて、そのやり方を臨機応変に変えてゆく。学習量が多すぎたために却って学習効果が下がることもある。内容を吟味してカリキュラム設計（デザイン）をし、なるべく授業時間内で完結できるものは完結させるようにしている。学生には、事前準備をしておくとより楽しめる、というように、負担と思わせないような課題を設定することが重要。学生自身に余裕ができると、知的好奇心が生まれ、結果、そういう学生は伸びる。

4－2. アクティブ・ラーニング導入前後で変わったこと

何より「授業準備」。以前は教える内容の教材にウェイトがあったが、今は、確認テストや課題設定等のデザインや学習の方法を考えるのに時間を割くようになり、また、学生同士の協働作業や、実際に手を動かすような作業等の効果的な方法を考えるようになった。

4－3. 学生の協働作業の中での不均衡（積極性の差など）の埋め方

埋めなくていいのではないか。学びたい学生、できる学生がどんどんやってもいいと思う。ただし、全体の底上げは重要である。全員一斉に同じ単元をやって、早く終わる学生は同じ単元の中でより多くの難しい問題を解き、できない学生はゆっくりと取り組む。その中で助け合いをさせる（ただし、答えは教えないというルールは明文化）。10 で良いところを 20 までやったら加点をするなど、評価に反映させる。言葉（コメント）によるフィードバックも重要で、「Q & A」もうまく活用するとよい。

4－4. 統一シラバスの授業におけるアクティブ・ラーニング導入について

授業の質、量ともに均一化、画一化が求められることが多い語学やオムニバス形式の授業において、一部だけ「アクティブ・ラーニング導入」とは現実的にはいかないことも多いが、研究授業のようなものをカリキュラムに取り込んで（シラバスに書きこんで）、授業の動画撮影をしたり、FD 研修を積極的に行って授業研究を関連部局で行ったりすると導入しやすくなるのではないか。

5.　失敗の経験談とその対策

今年度の大きな失敗は、1）受講者の疑問や要望に対するフィードバックが著しく遅い、十分にできなかったこと、2）今年度から開講学期が 2 学期から 1 学期に変更になり、既習事項が今までと異なるにもかかわらず、学習量が多すぎたことから、授業アンケートに受講者からの不満が多く挙げられた。失敗の原因を一人で探すのは困難で、多くの人に相談し、さまざまな角度からコメントをもらい、それをもとに分析し、気づきを得ることができた。ただし、問題の本質を見極めるのは授業を行っている自分自身である。また、3. にも上げた通り、他授業ではあるが、「Q & A」を充実させるのは効果的であった。

6.　インタビューを終えて

今年度の失敗談として山崎先生がお話し下さった内容から、学生へのフィードバックの重要性を改めて認識することができた。私が担当している授業の課題は自由記述やグループワークが多く、英語を苦手とする学生のモチベーションを上げていく手段として、より確実に且つ素早くコメントを返すことを意識していきたい。（木山先生）

2 時間を超えるインタビューにもかかわらず、門外漢の我々にも詳細にわかりやすく紹介してくださり、また、語学を担当する我々の疑問や悩みについても丁寧にお答えくださった。授業設計の重要性について改めて考える貴重な機会となった。（西）

（文責：西　香織）

信頼構築に意を尽くされる畔津憲司先生（経済学部経済学科）

インタビュアー：久多里桐子先生、山下剛

【科目名】労働経済学Ⅰ
【配当年次】3 年次
【選択・必修の別】選択
【受講者数】150 名ほど
【他学部他学科が受講可能かどうか】可能（法学部）

真似したくなる点：

学生との信頼構築を重視し、そのためにさまざまな工夫をされている。信頼関係を構築するのは、それが最も学生の学習効果を高めると考えるからである。信頼関係を構築するために、毎回の授業では、講義の意図・意義を説明し、学生の評価についても公正なものを設計するよう心掛け、授業アンケート以外の場でも学生から意見をもらうよう心掛けている。

1. 実際の授業の進め方

講義内容は、データや制度の解説は極力省き、自分の最も強みをもつ経済学的考察に力点をおいている。また講義内容は労働に関する問題解決のために必須であろう論理を厳選することで、なるべく労働経済学の知見を網羅するよう心掛けている。

毎回の講義資料は A3 片面、2～3 ページ程度を配布して、スライドを使用して解説を行う。資料は重要箇所を空欄にしており、学生はスライドを見て空欄を埋めていく。空欄埋め作業は、授業参加促進と居眠り防止が主なねらいである。スライド使用の意図は、教員が板書を省くことで解説に集中し、学生と向き合う時間を長くし、授業進行速度を速めるためである。また学生がノートをとる時間を短くすることで、前を向いて教員と向き合う時間を長くし、話を聞く時間・自分で考える時間を確保するためである。

2. 授業の事前準備

既に履修済みであろう経済基幹科目の知識・分析方法を積極的に活用し、そこから学生が演繹的に講義内容にたどり着けるよう工夫している。学生の数学的素養の差を考慮して、高度な数学的手法を用いる理論を、その本質を四則演算で全て解説できるよう設計している。一方で数学的素養の高い者に対しては、別途、数学的注釈や口頭での解説を加えている。

研究、依頼調査、学内運営業務等で得られる知見の講義へのフィードバックを可能な範囲で積極的に行っている。自分の研究と直接関わりがない業務も積極的に関わることで、講義内容が更新されている。これによって事例や理論の応用例が豊富になっている。また実務上、教員がどのような思考プロセスを経て理論を応用しているかを解説することができる。

3. 学生のやる気や興味・関心をどう引き出すか

まず、講義の意義・意図を理解してもらうことを重要視している。毎回の講義で、「労働経済学を学ぶとどんなメリットがあり、そのうち、労働経済学Ⅰの本日の講義はどのように位置付けられ、その内容を学べば、どんなメリットがあり、今後、何を実践・学習していかなければならないのか」を解説することを強く意識している。

また、理論の解説は事例をもって行うが、その上で、必ず学生の身の回りの事例にも帰着させるようにしている。例えば組織内部におけるフリーライド問題は、学生サークルの問題と関連させて解説する。

大講義室でもマイクは用いない。マイクを使わないメリットは以下の点にあると考えている。生の音声のほうが、学生が聞こえやすいらしい。自然と声に抑揚が生まれ、講義の解説が学生に響きやすいであろう。手が空くのでジェスチャーを交えて講義をしやすい。教室内を移動して講義しやすい。マイクを用いないと言っても、大きな声を出しつづけるとなると疲労するので、学生の近くで講義を行うようになる。

4. 事後学習の促進

まず、講義資料について、それ自体を読んでも内容が理解できることを念頭に作成している。これは学生が講義終了後に復習しやすくするためであり、また授業中に、授業進行速度についてこられなかった学生が、授業中に復帰することを可能にするためである。

また、課題を適宜出しているが、その際、取り組むかどうかは評価しないようにしている。相乗効果を考えて、学生のグループ・スタディを推奨しており、提出を義務化すると、他の学生のものを写すなど、学生の自主的な取り組みを阻害する恐れがあるからである。試験に類似問題が出題されることだけは伝えている。

5. 学生の学習評価をどのような方法で行っているか

小テスト（A４、2 枚程度、60 分相当）２回＋期末試験１回（A４、６枚程度、80 分相当）を行っている。全て持ち込み可にしている。これは、用語や公式を覚えるのではなく、使用に力点をおくというメッセージである。また、持込可にすると、難易度を高くしやすい。カンニング防止のためのモニタリング費用の節約という側面もある。

問題は多く難しくするよう心掛けている。資料を持ち込むだけ、あるいはテスト前だけの学習では、高得点がとれないようにしている。また講義内容を全て出題することから、学生が山を張る行為のメリットを低下させ、全て学習するよう促している。

試験は 3 回行い、OCR で採点を行っている。講義業務の効率化のためである。また各問題の正答率のデータが電子化されるので、分析し、講義へのフィードバックを行いやすい。

6. 授業アンケートの活用法

授業アンケートは、学生から信頼を得られているかどうかの目安としている。また、授業アンケート以外の場面で、学生からの意見を収集するよう努めている。例えば、ゼミ生には労働経済学Ⅰ・Ⅱの単位取得、講義への積極参加を推奨しているが、ゼミ生に講義に関連したヒアリングを頻繁に行っている。講義トピックへの関心、講義難易度、進行速度、理解ができなかった点、なぜ理解ができなかったのか、講義内容にミスはなかったか等を聞いている。また、授業開始前も早めに教室に行って、ゼミ生以外の他の受講者の関心・理解、口コミ評価などを教えてもらっている。講義で伝えたことが定着しているかどうか確認するために、1 年後にゼミ生やゼミ OB にヒアリングを行ったりしている。

7. インタビューを終えて

「学生との信頼関係を築く」という一貫した目的の下で、講義に関する全ての業務で細かな工夫をされていた。主体的な方向での工夫しか意識できていなかったので、学生との双方向のやりとりの中で、講義を練り上げていくという姿勢に学びたいと感じた。（久多里　桐子先生）

私では到底考えないような細部にわたって丁寧に考えられており、授業評価が高い授業とはこういうものかと感心した。グループ・スタディを推奨する工夫などは非常に興味深かった。私の領域でも取り入れられる余地がないか考えてみたい。（山下　剛）

（文責：山下　剛）

学生に力をつけてもらうことを目指す語り部、小野憲昭先生（法学部法律学科）

インタビュアー：中井 遼先生、秦 正樹先生、石塚壮太郎先生、矢澤久純

【科目名】相続法
【配当年次】2 年次
【選択・必修の別】選択
【受講者数】約 20 名
【他学部他学科が受講可能かどうか】不可

真似したくなる点：
学年ごとに異なる学生の特徴（傾向）を早めにつかみ、各学年に応じた講義を心がけるようにしたい。「語って、聞かせる」という点を忘れないようにしたい。

1. 実際の授業の進め方

授業は、詳しいレジュメを用意し、それに沿って話をしている。かつて、じっくり話を聞いてもらうことを心がけた時期が長かった。その頃は、レジュメを多めに配っておいて、予習をしてきてもらうことが前提になっていたが、最近はレジュメやテキストを読んでこない学生が多い。そこで、講義中に勉強してもらうしかなくなりつつある。しっかり聞いて、ノートを作ってもらうということを心がけている。学生が自分で作ったそのノートが、そのまま試験対策になると考えている。

試験範囲は、特に限定をすることなく、講義で進んだところすべて、としており、科目の全体をきちんと学習してほしいと考えている。ただ、最近は、それだとしんどい、という学生が多くなったのは確かではある。

また、レポート課題を学期途中で出すことで、書く練習をさせている。かつて、月に一回、レポート課題を出したこともある。

2. 授業の事前準備

レジュメの記述量を多めにしている。本当は、レジュメやテキストを予習として事前に読んできてもらうことを考えていたが、最近は読んでこない学生が多い。加えて、講義中は自分でノートをとってもらうことを考えていたが、最近は、講義中に手を使ってノートを書かない学生が増えてきている。そこで、最近は、レジュメを詳しくしている。レジュメは、15 回講義で 100 枚超（A4 サイズ）ぐらいであり、印刷して、教室に持って行っている。

それ以外の事前準備としては、提供する話題をいろいろ考えている。家族に関する法の講義となるため、自分の家族の話や自分が経験したことをアレンジして話すことにしているので、その話題を考えている。

3. 学生のやる気や興味・関心をどう引き出すか

講義は、いわゆる論点が中心となる。そこで、各論点について考え方を複数、提示して、どちらが良いと思いますか、という問いを投げかけている。

レポート課題を出すことも、このレポート課題をきっかけにこの科目に関心をもってほしいという気持ちから、行なっている。

4. 評価方法

評価方法は、定期試験と上記のレポート課題である。前者が 8、後者が 2 の割合で評価する。

5. 授業アンケートの活用法

授業アンケートについては、やはり、学生の自由記載欄を重視している。よく書かれるのは、「先生の話を聞いていると眠くなります。」というもの。私は抑揚をつけた話し方は、やや苦手であると思っている。

6. かつて行なっていたアクティブ・ラーニングについて

小野先生がかつて行なわれていた、いわゆるソクラテス・メソッドについて質問したところ、快く紹介して下さった。

まず、学生の席を決めて固定し、名前もメモしておく。前から 3 列目の人までは、単位はあげる（C）と約束し、その代わり、その人たちにどんどん当てていって、答えさせ、正解したら点数をつけていく。これはすなわち、C の成績から上がるようにがんばって予習してきなさい、ということを意味する。そこから後ろの人には当てないが、3 列目までの人が答えられなかったら回答を許し、正解だったら加点する。前から 3 列目までに座るか（最低でも C は約束される。）、それより後ろに座るかは、初回の講義時に学生にルールを説明して、選ばせる。後ろの人たちは、試験を受けることで、成績がつくのである。このやり方は、受講生が 90～100 人ぐらいのときにもやっていた。ただ、こうしたやり方は嫌だという学生が増えてきて、できなくなった、とのことである。

7. インタビューを終えて

小野先生は、長年の教育経験から、学年ごとに学生の特徴があると感じておられ、教員はその特徴（傾向）を早くつかんだ方がよいとの言葉は重要と感じた。学年によっては、事前学習をしてこないとか、レジュメやテキストを読んでこない学生が多いと小野先生は感じておられ、そのような学年であれば、それに対応した講義をした方が良い。

小野先生は、かつて、いわゆるソクラテス・メソッドを実践されておられ、この点が、法学部内でも知る人ぞ知る、小野先生の科目の大きな特徴であった。しかしながら、最近は、それを嫌がる学生がいることも事実であり、実施されていない点は、いささか残念ではあるが、学生の意識の変化もあることであり、やむを得ないであろう。

また、小野先生は、教員にはそれぞれのやり方があるのであり、そのやり方の多様性の尊重を指摘された。すなわち、学生にも好みというものがあるわけで、学生ごとにフィットする教員がいることが望ましく、画一化は避ける方が良いとのお考えであった。これも、まさに長年のご経験があるからこそ指摘できる事柄であり、学部内 FD を考える上で、無視できない視点を述べられたと思う。大学での講義は、それぞれの教員の個性に規定される面があるのは確かであり、だれであっても卒業後に「あのとき、あの教員はこれこれと言っていた」との思い出が残るものである。こうした意味で、小野先生は「語り」というものの重要性を意識されていることが、ひしひしと感じられた。後続の者として、小野先生の「語り」に少しでも近づけるように努力したいものである。

（文責：矢澤　久純）

聴講した内容を要約する教育をする田島 司 先生（文学部人間関係学科）

インタビュアー：　秦 正樹先生、浅羽 修丈

【科目名】社会心理学・心理学概論
【配当年次】2 年次・1 年次
【選択・必修の別】選択科目
【受講者数】70 名・100 名
【他学部他学科が受講可能かどうか】他学科受講不可

真似したくなる点：
・聴講しながら要約する能力を育成する工夫をしている点。
・進度に合わせて学生の理解度を確認し、適宜、授業期間中にフィードバックする点。
・授業の難易度にグラデーションをつけて、モチベーションが異なるすべての学生にアプローチしている点。
・実際に学生自身に体験させる中から、心理学の諸理論を理解できるように工夫している点。

1.　実際の授業の進め方

変わったやり方はしていないが、受講生が途中で眠くならないような時間配分を心がけている。例えば、口頭での説明の合間に、心理実験を挟むなどして、授業への参加意識を高めている。

配布する資料は、画像とグラフが中心であり、文章で丁寧な解説をしている資料は用意していない。大学での学習は、聴講しながら自分で要約を書くことが必要であるため、訓練の一環としてそのようにしている。特に、1 年次対象の「心理学概論」では、5 分間の解説の後、要約を書かせる訓練をしており、「それが大学での学習方法である」ことを事前に説明している。

15 回の授業のうち、2 問で構成された小テストを 4 回程度実施している。その目的は、授業の内容がしっかりと伝わっているかどうかを確認するためである。この小テストは、予告なしに実施するが、資料や要約が記述されたノートの持ち込みは可能としている。そのため、受講生は、小テストで高得点を獲得するためには、普段から質の高い要約を書くことが要求される。緊張感を持って受講するきっかけとなることが期待できる方法である。

小テストの結果、伝わった内容に誤解が見受けられる場合は、すぐにフィードバックを与えている。また、小テストを実施した次の授業では、小テストのコメント（テスト結果や追加の説明など）を配布している。

授業での話し方にも工夫している点がある。論理立てて淡々と話すのではなく、ひとつひとつ受講生に確認したり、話しかけたりすることを心がけている。また、論理立ててきれいに話すと、受講生は眠たくなる傾向があるので、相反する仮説や事例の紹介などによって一時的に混乱・矛盾を感じさせる話し方をすることもある。当然、混乱・矛盾は、その後で解決するような解説を加えている。

2.　授業の事前準備

事前に準備するスライドや配付資料は、画像やグラフを中心に構成している。文章による詳細な解説は資料には掲載せず、口頭でのみ解説するようにしている。その理由は、前述のように、受講生には聴講しながらしっかりとした要約が書けるようになる訓練が必要で

あると感じているためである。
また、授業中に実施する心理実験の準備にも時間を割いている。
授業で説明する内容については、どのような話題を提供するかということを最初に考えた上で、CP・DP や研究の内容との兼ね合いを考えながら決定している。研究の内容との兼ね合いについては、専門分野の最先端を話したいが、それは十分に成熟した理論ではないため、主に成熟した理論が記述されている教科書の内容が中心となる。

3. 授業の質の向上をはかるために、独自にどのような工夫をされているか

「社会心理学」の授業の 1 回分を使って、田島先生のゼミ学生の研究発表を行っている。緊張感と責任感をもって準備に励むゼミ学生の姿が見られるだけでなく、「社会心理学」の受講生にとっては、先輩たちの話が聴ける良い機会となる。先輩たちの話を聴くというのは、その研究について知ることができることはもちろんだが、普段と違う新鮮な雰囲気ができるので、より集中して受講できるようになる。

4. 学生のやる気や興味・関心をどう引き出すか

4.1 授業内容に元々関心のある学生のやる気や興味をさらに引き出す工夫

授業内容について、まだ定説になっていない話題をすると、元々関心のある受講生のやる気や興味をさらに引き出しやすい。すなわち、授業内容に関連する研究分野において、最先端でホットなテーマについての話をする。例えば、「この話題は、まだまだ諸説あるよ。その中でも、この説が今のところ有力だよ。」といった感じの話をする。

4.2 授業内容に関心のない学生のやる気や興味を引き出す工夫

授業内容と身近な日常生活の話題とを、いかに結びつけるかがポイントになると考える。

5. アクティブ・ラーニングの実施とその工夫について

座学形式が 8～9 割に対し、アクティブ・ラーニングは 1～2 割程度実施している。「心理学概論」では、4～5 人でグループを作り、4 問程度用意されている用紙を配布し、それに対して議論させた上で結論を記述させるワークを実施している。
「社会心理学」では、アンケート調査による心理実験を行っている。例えば、自分の性格（知らない人と話をするのは緊張する方か？人前で話すのは苦手な方か？恥ずかしがり屋か？）について調査する用紙を配布して回答させ、それを前まで提出させる。その際、必ず友達の中からひとりが代表して前まで提出するように指示する。すると、恥ずかしがり屋は席に残って、それ以外の性格の人が前まで提出する傾向にあり、それをその場で集計してグラフで表示し、解説する。
他にも、図形の書いた紙片を見せて、その特徴を次々に伝達していくとどうなるかという心理実験や、ジグソー法による学習も行っている。

6. インタビューを終えて

私は、できる限り丁寧な解説した資料を配付することが多いが、田島先生はその逆の考え方をされている。大学での学習は、学んだことや重要なことを自ら把握し、それを要約することが求められるという考えは、私も共感することであり、その教育を授業で実施されていることに大きな感銘を受けた。受講生に飽きさせない工夫をするだけでなく、大学生として必要な能力を育成することを心がけた授業構成は、学ぶべき点が多いように感じた。

（文責：浅羽 修丈）

学生の興味の方向を探り講義にフィードバックする森田洋先生

（国際環境工学部環境生命工学科）

インタビュアー：柳川勝紀先生、河野智謙

【科目名】微生物学
【配当年次】3 年次
【選択・必修の別】選択必須
【受講者数】70～80 名ほど
【他学部他学科が受講可能かどうか】可能（エネルギー循環化学科）

真似したくなる点：講義内容の充実と並行して学生自身が学ぶ意味を実感できるような情報提供にも重点を置かれています。また学生とのコミュニケーションを重視し、機会を捉えて学生の意見や質問を聞くこと、質問に回答することを実践されています。

はじめに：平成２９年４月に国際環境工学部環境生命工学科に着任された柳川勝紀先生（専門：環境生物学、極限環境の生物、微生物学）に同じ生物分野の講義を長期間にわたり担当されている森田洋教授（環境生命工学科長；専門：微生物学）に新任の先生の立場からインタビューをしていただき、Ｑ＆Ａ形式での意見の交換をしていただきました。

1.　授業の進め方について教えてください。

「微生物学」は、１学期の金曜日・５限に開講されていることもあり、学生の表情に１週間の疲れと１日の疲れの両方が表れる時間帯になっています。そこで、学生の集中力を維持させるためにも分かりやすい講義を心がけています。特に小・中規模の教室であっても必ずマイクを使用し、適量の板書を通じてノートをとる作業を交えて、聴覚、視覚の刺激と手作業をバランスよく取り入れることを意識しています。

2.　１学期の公開授業（微生物学）を見学した際、板書による講義をされていましたが、板書へのこだわりはありますか？

別に担当している「食品工学」の講義の場合は、身近な食品と関連づけて話をするため、パワーポイントを使用することもありますが、できる限り板書で講義を進めます。

パワーポイントはどうしてもこちらから与える情報量が多くなりがちで、講義のスピードも早くなり、学生の理解が深まらないように感じています。板書するぐらいが適切なスピードで、なおかつ学生さんも頭のなかで整理をしながら、ノートをきちんと取ることで、理解度が増すように思います。

3.　一方向の講義にならないようにしたいのですが、特に大人数の場合は、学生からのレスポンスもまばらで難しく感じます。何かコツがあれば教えてください。

講義中に学生を指名して、答えさせるようなことはしています。また要所要所で出欠と併せて感想や質問を紙に書いてもらうようにしています。質問は次の講義時間にできるかぎり答えるようにしています。感想では難易度や学生さんが興味をもっていることを抽出し、講義の進め方の参考にしています。

4.　数学や化学など他の科目と異なり講義内に演習問題（or アクティブ・ラーニング）を

入れるのが難しい科目を担当されていると思いますが、小テストや演習などは実施していますか。

ほとんど実施しません。数学や化学は演習問題とセットに進めたほうが理解が深まると思いますが、微生物学や食品工学といった科目はできる限り座学に時間をとったほうが良いと考えています。

5. 一コマの準備にどれくらいの時間をかけますか。また、内容は毎年どの程度更新していますか。

長年にわたって改良しながらつくりあげていますので、1コマにトータルでどのぐらい時間をかけて準備をしているのかはわからないです。更新は毎年少しずつします。上にも書いたように、感想で難易度や学生さんが興味をもっていることを抽出し、次年度に活かしていきます。またニュースで微生物学や食品工学に係るようなものが出てきた時にはその話を入れながら進めるようにもしています。

6. 成績が二極化されてしまう傾向があるように感じますが、上位と下位のどちらを意識しながら講義を組み立てますか？ また二極化が進まなくするための対策などはありますか？

上位、下位のどちらも意識しています。難しい話をするときでも、身近なものを例えで出すことで、成績下位の学生にも興味をもってもらうように、また大事な部分は何度も繰り返し話をすることで、下位の学生に理解を深めてもらうように努力はしています。ただ、それでも試験をすると成績は二極化しますが・・・やる気も重要なファクターだと思います。

7. 学生のやる気や興味を引き出す工夫としては、どのような取り組みをされていますか？

出来る限りタイムリーなニュースを講義の中で取り上げ、学ぶ内容と社会とのつながりを実感させる工夫などを入れるようにしています。また、授業アンケート以外に、必ず複数回の記述式のアンケートを実施し、講義の内容に関する（1）感想と（2）質問を募り、講義期間中であれば質問をリストアップし、アンケートの翌週には回答するようにしています。また感想の多くは、講義の難易度に関するものなので、翌年の講義の組み立てにフィードバックします。これによって、年々、講義内容をブラッシュアップすることが可能になります。この形式のアンケート、特に自由記述式の質問の機会を設けているのは、学生自身のコミュニケーションへの関わりを促す意味もありますし、教員と学生間で意見やアイデアを交換する場としての意味もあります。

8. インタビューを終えて

インタビューを行った柳川先生ご自身が、２学期に同時間帯の講義を担当されていることもあり、参考になる点が多かった模様です。

（文責：河野　智謙）

第６章

おわりに

平成 29 年度 FD 活動を振り返って　―　これからの FD に何が必要か

中溝幸夫（FD アドバイザー）

■今年度の FD 活動全体としては、昨年に引き続いてボトムアップ方式とトップダウン方式をミックスした“ハイブリット方式”の FD 活動が行われてきました。この方式は、本学のような“FD センター組織”のない中規模大学において、ある意味で FD 活動の一つの理想型ではないかと思います。ここで“ボトム”とは、個々の教員を意味しています。ボトムアップ方式で重要なことは、個々の教員が FD 活動の主体は自分であるという“意識”をもっているかどうかです。一方、トップダウン方式で重要なことは、組織としての FD 活動の結果が、きちんと評価され、評価を取り入れて次のステップアップが図られているかどうかです。企画された活動が実践された後、参加者によるアンケートは、評価の一つの方法です。例えば、新任教員 FD 研修後のアンケート内容を十分に検討することが、次年度の研修に役立ちます。

■さて、停滞ぎみの本学の FD 活動を今後、如何にして活性化していけばいいでしょうか？　昨年の本報告書の「あとがき」に次のような記述があります。『・・・FD 活動のマンネリズムを打破するためには、教員の工夫しかありません。「新鮮さ」「面白さ」「有用性」の三つをキーワードにして FD 活動を工夫していく・・・それが今、本学の教員に求められていること・・・』さて、どんな工夫が考えられるでしょうか？

■FD とは、簡潔に言えば「大学教育の質」を高めることです。大学教育の質が何を意味するかという問題は、ひじょうに難しいですが、教育の質の中に『学生の学びの促進』が含まれるということについては、異論はないと思います。学生の学びの促進をできる限り支援することが、大学教員のミッションであり、それを可能にするのが教員の『教育力』ではないでしょうか。以上の“理屈”が正しいとすると、つまるところ FD 活動は、どのようにして大学教員の教育力を伸ばせばよいかという問題に帰結します。本学が組織的 FD 活動において“工夫すべきこと”とは、この課題解決だと私は思っています。この課題解決は、ある意味、授業で教員が学生に課す課題に似ています。つまり、FD とは教員に課せられた課題をどう解決していくかという“学生の学習過程”と実は同じなのです。さて、どんな工夫があるかを世界や我が国の大学から学んでみましょう。

■イギリスの大学では、大学教員の教育力を伸ばすための“キャリア支援”をその大学自体が組織的に行っています（加藤かおり，2014 ）。それは『プロフェッショナル教育課程』と呼ばれるもので、大学院修士課程レベルの正規授業課程（全体で 60 単位を取得）からなっています。授業内容は、例えば「自分の授業実践を同僚からのフィードバックを得ながら振り返り、講師から情報提供される教育・学習理論を用いて省察する」とか、「新しい教育方法や IT ツールを用いた教育開発のアイデアを同僚とともに創造する」ことです。新任教員（大学での教育経験が３年以内で、採用されてから３～５年以内）は、実質的に義務化されたこのような授業を“オンザジョブ型”で受講していきます。さらに、この授業自体、アクティブ・ラーニングの手法が取り入れられています。このような授業を受講して単位を取得することは最終目的ではなく、全英の大学で進められている『大学教育職のプロフェッショナル』として認定されるための手段の一つとなっています。

おわりに

■FD 先進大学と言われている愛媛大学の試みを紹介しましょう。愛媛大学では、新任教員にテニュア・トラック制度を導入し、体系的なプログラムのもとで教員として必要とされている業務（教育・研究・大学マネジメント）全般にわたって能力開発を行うことによって、大学教員としての自立を促しています（秦敬治、2014)。＜これは、いわば新任教員研修の内容を体系化したもので、組織的に制度化されています。＞　プログラムは、ED（Educational Development)、RD（Research Development)、MD（Management Development）からなっており、例えば ED では、「授業デザインワークショップ」「授業コンサルテーション」「同僚の授業参観」「学習評価の基本」などの研修科目が含まれています。RD では、「研究者倫理」「知的財産権」「外部研究資金獲得法」などの科目、また MD では、「大学の危機管理」「高等教育政策論」などの科目が含まれています。要するに、新任教員の研修を**体系的に、段階的に、継続的に**行うことによって“大学教育のプロフェッショナル”を育成していこうという斬新な試みです。

■以上、「大学教員の教育力をどのようにして伸ばせばよいか」という問題に対する二つの大学の“工夫”について述べてきましたが、本学の新任教員研修の内容とは質的、量的にもかなり隔たっていることがわかると思います。どちらも資金的基盤がしっかりしていないと実現できないことがわかります。上に紹介した二つの大学の FD 活動を本学に今すぐ導入することは、資金的にも組織としても難しいでしょう・・・。もっと簡便な工夫はないでしょうか？

■私は、今年度、本学で行われた研修の一つにそのヒントがあるように思います。その研修とは、基盤教育センター＆情報総合センターが主催して行われた『授業で Moodle を使ってみよう』というセミナー形式の研修です。この研修のように教員自身が学習活動に参加するアクティブ・ラーニング型の研修を“体系的に”準備して、年間を通して、段階的、継続的に行っていくことが本学のこれからの FD 活動においてもっとも望ましいのではないかと考えます。このような研修が準備されれば、“教育力”をもっと身につけたいというモチベーションをもった教員は、おそらく自発的に参加するだろうし、FD 委員会はそんな教員を強制的な方法ではなく、自発的なやり方で“支援する”ことになるでしょう。

■このような研修こそが、本学がこれから行っていくべき工夫の一つであると私は考えます。

◆引用文献

・加藤かおり (2014)「イギリスの新任教員教育課程―日本の「新任教員研修」とどこが違うのか―」現代の高等教育, No.559, 54-58.

・秦　敬治（2014)「FD の実践と課題―愛媛大学の事例に基づいて―」現代の高等教育, No.559,36-41.

平成 29 年度　北九州市立大学 FD 委員会活動報告書
平成 30 年 3 月発行

編集・発行　北九州市立大学 FD 委員会
〒802-8577
福岡県北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号